

RISKY×DICE～転生した俺の念能力がリスクーダイス～

スプライト1202

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

TRPGの最中、ファンブルと共に心臓発作を起こした主人公。死んだと思いきや——そこは「流星街」!?! ※考察多め。「流星街で人々はどんな生活をしているのか」などを考察と妄想を交えながら語っていきます。

目次

テンセイ×スル×テンカイ	1
テ×イタイ×テイタイ	7
コクイン×ト×テンゴク	11
コクシ×ト×モクシ	16
シヨウジヨ×ノ×シヨウジヨウ	21
マチ×ト×マーティー	26
ニユウヨク×ト×シユウトク	30
ゴカイ×ト×コウカイ	36
センパク×ニ×センニユウ	40
マッテル×ト×マツテテ	45
ヨサン×ト×ヨハナン	49
ゴウトウ×ト×コウトウブ	53
トウゾク×ト×トウソウ	57
フトウ×ナ×フコウ	62
アカンパニー×オン×アントキバ	68
ゼツケイ×ナ×コウケイ	73
カクヘン×スル×カクリツ	80

テンセイ×スル×テンカイ

「はい、じゃあマーティーン＝ストウーは1d20でダイスロールしてください」

「9以上出せばいいんだろ？ はー、ヨユー。超ヨユーだわー」

「フラグが立ったのでー1の補正で」

「ウツソだろ理不尽！」

俺はいつものように、自宅を訪れた友人たちとTRPG（テーブルトークロールプレイングゲーム）に興じていた。

「あ、HUNTER×HUNTERじゃん。これ全巻揃ってるの？」

「永遠に揃わないぞ」

「富樫仕事しろ」

「これが不朽の名作ってヤツかア」

「そういうイミじゃねーから」

「そーいやアタシ、キメラアント編までしか読んでねーや。借ーりよつと」

ワイワイガヤガヤ。ワイワイガヤガヤ……。

「うるへエえええええ！ 静かにしろ、また隣から壁ドンされるだろうがアああー！」

「「お前が一番うるせエ」」

総ツツコミを受けながら、俺はダイスを振った。

まあ、いつものやり取りだ。俺はこんなバカ騒ぎが永遠に続くのだと根拠もなく思っていた。

そして……終わりはいつだつて突然やってくる。

——コロコロ。

『1d20↓ファンブル』

——デデーン！

効果音が脳内再生される。いわゆる大失敗というヤツだ。

うげっ、最悪！ そう叫ぼうとしたとき——ドクン、と心臓が不規則に跳ねた。

「……………う、ぐ？！」

俺はテーブルに突っ伏した。身体が動かない。苦しい。声が出ない。

なに、が……。

「見事なフラグ回収で草」

「これが爆死ってヤツかあ」

「おーい、いつまで死んだフリしてんだよ。リスキーダイスを振ったわけでもなし」

友人たちの笑い声が木霊する中、俺の身体はゆっくりと傾いていき……落ちた。受け身も取れず、鈍い音を立てて身体が床を跳ねる。

友人たちがようやく異常に気づく。

「え?」

「おい、しつかりしろ!」

「……やばい、呼吸してない! 心音がおかしい!」

「救急車早く!」

「ウソだろ……起きろ! 起きろよ!」

意識が薄れていく中、最後に目にしたのはテーブルから転げ落ちた20面ダイスと、HUNTER×HUNTERのコミックスだった。

そして――。

* * *

「……え?」

気づくと俺はゴミ山に立っていた。

「おエええ!?! ひっでエ臭い……どこだ、ここ?」

あたりを見渡せば、あるのはゴミ山とツギハギだらけの小屋ばかり。……正直、その小屋もゴミに見えた。

「というか……なんじゃこりゃあ!?!」

痩せ細った小さな両手。視点も低い。

「……うぐっ!?!」

不意に激しい頭痛に襲われる。

「そうだ……俺は」

頭の中を記憶が駆け抜ける。

そうだ……今の俺は5、6歳の男児だ。

最初の記憶は、まだ赤ん坊だった俺をゴミと共に捨てる母親の姿。それ以降はずつとこのゴミ山暮らし。言葉よりもずつとはやく、ゴミの拾い方を覚えるような生活だった。

「……夢でも見てるのか？」

あたりをぐるりと見渡す。

このゴミ山を見て、俺は最初『スモーキーマウンテンのようだ』と思った。だが、ちがう。今世の記憶がそう言っている。

足元に、それを裏づけるものが落ちていた。

そのゴミ——新聞を拾いあげる。俺は書いてある文字が読めた。知っている文字だったのだ。

今世で学んだわけじゃない。元から知っていた。

新聞が風にあおられ、俺の手を離れる。

宙を舞うそれは、そのすべてがハンター文字で書かれていた。

「そうか、ここは……」

ここは『なにを捨てても許される街』——。

「——流星街だ」

HUNTER×HUNTERの世界に存在する架空の……いや、架空だったはずの街だった。

「は、はは……ありえねエ」

自然と身体が震えてくる。

「勘弁してくれエえええええええええええ！」

「っ!？」

いきなり叫んだせいで近くのオッサンがビクツとなったが、そんなんはどうでもいい。だってH×Hの世界に落ち込んだぞ？ う

れしい……以上に困る。つか、恐エよ！

「H×Hの世界とか危険ばっかじゃねーか！」

あの世界はなにげにヤバイ。

わけのわからない厄災や、初見殺しの念能力、殺人すら許されるプロハンターがいる世界だぞ？ しかも、銃やナイフとはちがって、取

り締まることもできない。

なにより……。

「もう、戻れねエのかなア……」

まだアイツらに別れの言葉すら言っていない。

はア……マジかー。H×Hの世界かー。そうかー。

シヨックに打ちひしがれながら、俺は心の中でカウントする。

……10秒。

「うっしー」

パンつと頬を叩いて切り替える。

来ちまったもんはしようがねエ。『進撃の巨人』の世界じゃなかっただけマシだと考えよう！

となれば、まずは状況確認だ。おっと、ちょうどいいところに。

「そのオツサ……おにいさん！ 今って何年何月だっけ!？」

「えっ。1984年の2月だけど……」

「ありがとうー！」

「お、おう」

オツサンは関わりあいになりたくないと思ったのか、そそくさと俺から距離を開けてゴミ漁りを再開した。

「えーつと、今が1984年の2月だろ？」

自分の考えをまとめるべく、だれにも聞こえない程度の声量でぶつぶつとつぶやく。というか俺のクセだ。

本編開始は1999年だから、まだ時間はある。幸いにも、今日いきなり流星街をキメラⅡアントが攻めてくる、なんてことはなさそう
だ。

「となると、この時期になにが起こるか、だけど」

本編開始前に流星街で起きた重大なイベントとなると……旅団関係か？

「あれ？ 幻影旅団ってもう結成してるのか？」

原作時点——1999年時点でのクロロが26歳だから、今は11歳か（これはヨークシンでネオンが占ったときに言ってたのをはつきりと覚えてるから、間違いない）。

「となると、クロロが旅団を結成したのが13歳だから……あと2年しかないのか!？」

いや、待て待て待て。と自分を制止する。

そもそもクロロが旅団を結成したのって本当に13歳だったか？
頭をひねるも……。

「あー、くそー！ 思い出せねエ！ 昔、あんなに読み込んだのに！」
その情報が原作知識なのか、ネット上のウワサだったのかも判然としない。このポンコツ脳みそめ……。ほかのイベントに関しても、なにかあったような気がするが思い出せないし……。

つまりは手掛かりなし。

「はア。結局、今やれることをやるしかねエか」

今、やれること。それは、いつ巻き込まれるかもわからないトラブルに向けて、すこしでも生存率をあげることである。すなわち……。

——念の習得だ！

「ふひっ！」

おっと、思わず変な声か。

こんな状況でも、さすがに念能力の話となるとテンションがあがってしまふ。だれだつて一度は妄想したことがあるだろう？ オリジナルの念能力を。

「だ……ダメだ。まだ早い……堪えるんだ……」

念の習得には段階がある。

まずは精孔（しょうこう）——オーラの出る体中の孔を開かなければならない。とくに目の精孔を開かなければ、オーラを見ることがすらできない。

「……ん？ あれ？ なんかその前にやらなきやいけないことがあつた気が」

しかし、思い出せない。思い出せないということは……まア、それほど重大なことでもないのだろう。

さて、肝心な精孔の開きかただが……2通りある。

ゆつくり開くか、ムリヤリ開くか。

「ま、1択なんだけどな」

ムリヤリ開くには、開いてくれる人が必要だ。が、俺にそんな師匠がいるはずもない。毎日座禅でも組んでゆつくり開いていくしか道はない。

「……っしや、やるぞオ！ おオー！」

こうして俺はこの世界での——流星街での生活がスタートしたのだった。

* * *

——それから、3ヶ月後。

「なんつも起きねエええええええ！」

俺は完全に、念習得の壁にぶつかっていた。

テ×イタイ×テイタイ

この世界で目覚めてから3ヶ月間。俺は毎日、ゴミを拾って日銭を稼いでは、座禅を組んで修行をする日々を送っていた。

修行開始から1ヶ月。

なにも変化はないが、問題はない。はじめたばかりだし、こんなもんだらう。

むしろ今は、座禅を組むこと自体がなかなか楽しい。こんなゴミ山でもちよつと気分が落ち着くのだ。健康法の一環くらいの気持ちで座禅を組み続けた。

修行開始から2ヶ月。

まだ変化はないが、問題はない。もとより長期戦は覚悟の上だ。

10万人にひとりの天才であるズシでさえ3ヶ月もかかった。それもウイングという優秀な師の下で、だ。

つまり、まだまだ焦るときではない。

そして、あつという間に修行開始から3ヶ月が過ぎた。

つまりは今。

「……精孔開くどころか、その気配すらもないんだが」

ここに来て、焦りが俺を苛みはじめた。たとえ凡人でも、そろそろなにか変化があつてもいいと思うのだが……。

もしかして俺はものすごくムダなことをしているんじゃないのか？ 修行方法をまちがってるんじゃないのか？ ただ無為な時間を過ごしているんじゃないのか？

正直、日々を生きていくだけでも精一杯なのだ。

ゴミをヘトヘトになるまで拾って、ようやく1個のパンと1杯のスープが手に入る。海水で身体を洗い、名前も知らない他人とぎゅうぎゅう詰めになりながら小屋（というか、ビニールシートや板で区切っただけの場所）で眠る毎日。

「……(っ)ほっ、(っ)ほっ」

加えてゴミ山という劣悪な環境。それらは確実に幼いこの身を蝕んでいた。

はつきり言つて、余裕がない。はじめこそ座禅が念習得に繋がっていると思ひ、モチベーションも高かった。しかし、今はそれも無い。座禅を組んでいる時間があれば、横になって休みたいという思いが強くなっていた。

もはや、いつ挫折していてもおかしくはなかった。

それでもなんとか修行を続けていたのは、この世界に『念が実在する』と知っているから。でも、それも……。

「このままじゃダメだ」

そう思いながらも、やることは今日も今日とてゴミ拾ひ。

あつという間に夕刻が訪れる。俺はゴミを持って買い取り場所へ……ダンプカーのほうへ向かう。そして、その手前にある広場でゴミの整理とトレードを行う。

「おにいさん、ビニールある？ 空き缶と交換してくれない？」

「3束ある。空き缶6つと交換だ」

「了解。どうも」

トレードを繰り返すうちに手元にはビニールが多くなっていく。袋だったり、繊維の束だったり。それを持って、ダンプカーの元へ。重さを量ってもらおう。

「1.0キロね。はい、100J (ジエニー) ※1J ≒ 約0.9円

ホツと一息。

買い取りには下限がある。1キロからしか買い取ってもらえないのだ。

だから毎日の生活がギリギリの人は、こうして広場で同じ境遇の人とトレードをすることで、その下限をクリアするのだ。

手にした小銭を片手に商店街に行く(といつても、ここもゴミ山と大差はないが)。

考えることはひとつ。

「なんとか、しないと」

ゴミを拾わねば、今日のおまんまにもありつけない。しかし、ゴミ拾いをしている限りこの環境からは抜け出せない。デッドロックだ。なにか……この状況から抜け出すなにかが欲しい。

——変化はいつだって唐突に訪れる。

「……ん？　なんだか今日は騒がしいな？」

騒ぎの中心へと近づく。しかし人垣に阻まれ、なにも見えない。そのときドンつとぶつかられる。

「あ!？」

手からポーンと小銭が飛び出し、コロコロと足の合間を転がっていく。ぎゃアあああああ！　俺の全財産がアあああああ!?

俺は慌てて追いかける。

「すいません、ちよつと通して……」

小銭はコツンとだれかの足にぶつかった。カランカランと揺れてようやく止まる。ふう、ようやく追いついた。と拾おうとして気づく。視界が開けていた。

顔を上げると、そこには幾重にもボロを纏い、防塵マスクで顔を覆った人物。むき出しの手足には幾筋ものシワが刻まれ、顔は見えずともその老齢が窺える。

俺はそのシルエットにはつきりと見覚えがあった。

「……え、長老?」

流星街の長老だ。“番いの破壊者(サンアンドムーン)”により同胞を爆弾に変えてメツセージを届けさせた……流星街きつての狂人。

うぎやアー!?　超危険人物に鉢合わせしちゃったアああああ!?

「あ、あはは……すいません。オジヤマしまし……ごほつ、ごほつ——んんっ!？」

慌てすぎて途中でむせた。と同時に長老が無言でぐつと顔を寄せてきた。

じつと俺の顔を見つめている——といつても、こちらからは向こうの顔が見えるわけではないが。つか、恐エえええええ!

しばしののち、長老はゆっくりと顔を離して踵を返す。

た、助かった……?」

そう安堵したとき、長老の取り巻きだったひとりがトントンと俺の肩を叩いた。

「長老がついて来いってさ」

うそん……。

あれ？ もしかして俺、死んじゃう？ 人間爆弾にされて特攻命令

されちゃうの？

地面に伏した硬貨は、大きく数字の書かれた面を天に晒していた。

コクイン×ト×テンゴク

「えっ?… えっ?… えっ?…」

長老に連れて行かれたあとは、怒涛の展開だった。

身体を拭われ、着替えさせられ、滋養のありそうな食事を与えられ、毛布を与えられて眠った。

あれ?… ここ天国かな?… なーんて冗談のひとつでも言いたいたいところだが……。

「ううっ……」

こんな至れり尽くせり。どう考えても異常だ。

死刑囚だって、死ぬ前は好きなもの食べさせてくれると聞く。

「恐エよオ、恐エよオ……」

「はは、そんな緊張しなくても大丈夫だよ」

俺の世話をしてくれた人物が笑いかけてくれる。長老のお付きし
てた人だ。

……つか、絶対ウソだよ。だって笑顔がめちやくちや胡散臭いも
ん。

「ああ……父さん母さん、不甲斐ない息子でごめんなさい」

天に祈りを注いでいると、先導してくれていたその人が足を止め
る。目の前にはテント……というかゲル（モンゴルの移動式住居）っ
ぽい家。

入るように促される。

「うっ」

悪あがきで逃げ出す隙を伺っていると、背中を押されてしまう。
おととつと、とたたらを踏んで家の中へ。そこには長老が待ち構えて
いた。

「ひっ……あ、えーつと。こここのたびはお助けくださり、まこと
に、あウ……感謝の思いが、ひっぐ……ぐすっ……」

命乞いしようとしたけど、恐怖に負けてしゃくりが……。

すると、長老が近づき、両手を伸ばしてくる。俺はぎゅつと強く目
をつむり、その瞬間に備えた。

「ヒエっ!？」

両肩にポンと手を置かれる感覚。あ、終わったわ俺……。しかし、なにも起きない。チラツと薄目を開けて、肩を確認する。とくになにもない。

「……あれ？」

長老はそれから俺の身体をあちこちペタペタと触った。脈を測られたり、熱を測られたり、背中をさすられたり、呼吸音や心音を確かめられたり……。つて、あれ？

室内にあつた鏡をチラリと盗み見るも、やはり身体のどこにも刻印は浮かんでいない。

さてはこれ……ただの診察だアああああ!？」

「体調が戻つたみたいでよかった、つてさ」

「ここまで案内してくれた人が俺に笑いかける。

「ちゃんとお礼を言つときだよ」

「え、あ……ありがとうございます」

長老はどことなく満足気な様子で頷いた。

それから俺は、ここまで案内してくれた人に連れられて退室し、なにともなく、もといた商店街まで送り届けられた。

「ここからの帰り道はわかるかい？」

「あ、はい。大丈夫です」

「ならよかった」

……え、ウソ？ 本当にこれだけ？もしかして俺、助かったの!？」

ひやつほオおおおおおう！ と叫び出しそうなのを堪えてお辞儀する。

「本当にありがとうございます!」

「いえいえ。せっかく長老から祝福を受けたんだから、また身体を壊したりしないように、気をつけるんだよ」

「はいー!」

じゃあね、と相手が去っていく。

それを見送り、俺は盛大に息を吐いた。

「はアああああああああああ! よかったアああああああああ

「あああ！」

「本当によかったア……いや、マジで、死んだと思った。

まったく、だれだよ。長老を狂人だなんて言ったヤツは。子供想いのめっちゃ人だったじゃねエか。刻印もされなかったし。

「すべては杞憂だったわけだ。あつはつは、めでたしめでたし——そう、安堵しかけたそのとき、脳裏をセリフがよぎる。

——せつかく長老から『祝福』を受けたんだから。

「……え？　祝福って……なんだ？」

「サアアアと頭から血の気が引く。

「ちよつと待て。いやいやまさか……そんな」

慌ててゴミ山を漁り、鏡の破片を探し出す。服を脱いで身体中をたしかめる。刻印はどこにもない。しかしそれは『見えない』という意味でしかない。

「俺は自身の足元がガラガラと崩れ落ちるような錯覚に陥った。

「『番いの破壊者(サンアンドムーン)』の刻印って……精孔開いてなくても見えるもんなのか？」

「記憶を探るも『番いの破壊者(サンアンドムーン)』の刻印に関して、一般人が言及するシーンは思い当たらない。

「いやむしろ、見えない可能性のほうが高いとさえ言える。

「ヒソカ v.s. クロロ戦において、大勢の人間が額に『人間の証明(オーダースタンプ)』の刻印をつけてヒソカに突っ込んで行った。しかし、ただの一度たりとも観客や実況がそれについて言及していなかったように思う。」

「……最悪だ」

「確信する。俺は——刻印を受けている。でなければ、祝福なんて言葉を使うはずがない。」

「そうか、長老がどうやって狂信者を作っているのかわかった。こうして幼いうちに恩を着せて、刷り込むんだ」

「いや、ちがう。それどころか……自分が爆弾であるとすら知らない人間ですら、暗殺者に仕立てあげることができる。なにせ、しかるべきタイミングで刻印が触れ合えば、それでいいのだから。」

「マズいマズいマズい！ このままじゃ俺、いつ死んでもおかしくねエ！」

しかも、いつ死ぬのかすら予測できない。

ふと身体のどこかに触れたとき、あるいはふとだれかに触れられたとき、爆死するかもしれないのだ。

「いや、落ち着け……落ち着け俺。冷静に考えろ」

自分の身体に太陽（プラス）と月（マイナス）の両方が刻印されていることはないはずだ。あるいは刻印されていたとしても、自分じゃ触れない場所のはず。

じゃないと、うっかりで爆発しかねない。

防ぐには……。

「そうだ！ ボノレノフになろう！」

全身を包帯で覆えば、触れても爆発することは……いや、アホか俺は！

ヒソカvs. クロロ戦において、クロロは審判の背中に刻印していただろうが。それも服越しに。

「いや、ちよつと待て。もしかして〃番いの破壊者（サンアンドムーン）〃って人間以外にも使えるのか？」

使えるとしたら、あの刻印は審判の背中ではなく服にされていたことになる。つまり、包帯で身体をぐるぐるにするという策が通用すること……。

「ああ、チクショウっ……思い出せねエ！ 使えたっけ、使えなかったっけ!？」

どれだけ考えても、行きつく結論はひとつ。

どうやったって、助かるには……。

「——精孔を開くしかねエ」

刻印の場所を特定するしか……オーラが見えるようになるしか、生き延びる道はない。

「やってやる……やってやるよ。なにがなんでも精孔を開いてやるっ！」

そうして俺は覚悟し、文字どおり死に物狂いで修行をはじめたの

だ
っ
た
—
。

コクシ×ト×モクシ

——精孔を開かなければ、どこに“番いの破壊者（サンアンドムーン）”の刻印をされたかわからない。

死にももの狂いで修行をはじめた俺……だったが、最初にやったのは今まで暮らしていた小屋を出ることだった。

あそこじゃ、他人に触れず生活するのはムリだ。人が多すぎる。可能性は低いとわかっていても、ほかの人と身体が触れた瞬間に爆死……という恐怖がぬぐえなかった。

必然、ほかに場所はなく……俺はゴミ山で寝起きすることになった。しかし、ある意味では都合が良かった。なにせ移動時間がゼロなのだ。

俺はゴミ拾い以外の時間、そのほぼすべてを修行に充てた。睡眠時間さえほとんど削って修行に打ち込んだ。もはや狂気にも近い集中力だった。

死への恐怖が俺を突き動かしていた。

毎日毎日、俺は座禅を組み続けた。

すると、いつからか座禅に組んでいるうちに、本当に無心になれるようになっていった。

もしかするとそれは、何時間も座禅を組み続けたせいで意識があいまいになっていただけ、かもしれない。しかし俺は、それでも構わないと座禅を続けた。

毎日繰り返し返すうち、あいまいな状態へと至るまでにかかる時間は短くなっていった。そしていつしか、座禅を組むと、スイッチが切り替わるようにその状態へと至れるようになっていた。

……それは死にももの狂いの修行をはじめて、4ヶ月がすぎたころだったろうか。

最悪の環境で寝起きしているせいで体調が悪化し、熱を発するようになっていた俺の身体に変化が起きた。

腹の奥のほうで、なにか、病とは別種の熱がうねったのだ。

一瞬の錯覚かと思われた熱だったが……そこからの変化は顕著

だった。

ゴミを集め終わるまでの時間が、急速に縮まりはじめたのだ。そのうち腹の奥から湧いた熱は、病の熱を身体から追い出すかのように全身へと広がるように。

それに呼応するように、身体は調子を取り戻し、たくましくなっていくた。

そして——その日は唐突に訪れた。

朝、いつものように目を覚ますと身体をモヤのようなものが覆っていた。……いや、ちがう。それはもとからそこにあつたものだ。

そう、俺は——。

——オーラが見えるようになっていたのだ！

「そうか、目の精孔が開いたんだ……！」

全身を覆うモヤ。それは紛れもなくオーラだった。

俺はオーラを視認していた。

「成し遂げた……俺、ついに成し遂げたんだ……！」

身体の奥から感情が噴き出す。背筋がゾクゾクと震えた。

「~~~~~っ！ ……よっしゃあああああああああつ！」

よろこびのあまり、俺は住処を飛び出し、跳ねるようにゴミ山を駆けた。ゴミがいつとう高く積み上げられたところをわざわざ登り、そのてっぺんで吠えた。

ひとしきり吠えると、ようやく落ち着いた。

「……いかにいかに」

なんだアイツやベエ……みたいな視線を向けられながら、ゴミ山を降りる。と、すれ違った人を見て気づく。明らかに俺の発するオーラのほうが多いのだ。

「そうか……ムダじゃ、なかったんだ」

目の精孔が開いていなかったから、まだ見えていなかっただけで……努力はきちんと、積み重なっていた。すこしずつ、全身の精孔は開いていたんだ。

実際、いつしか俺は大人も顔負けの力自慢になっていた。身体はこれまで感じたことがないくらい軽かった。

……まア、バテることも多かったが。

「つて、こんなことしてる場合じゃねエ!？」

達成感が勝ちすぎて、うつかり本来の目的を忘れるところだった。

ゴミ山を漁り、目当てのものを探す。

「あつたよ鏡が！ さて、と。いったい身体のどこに〃番いの破壊者（サンアンドムーン）〃の刻印が……あれ？」

鏡（の破片）を覗き込んで首を傾げる。オーラが見えない。自分の両手を見下ろすも、やはり消えている。

「ノオオオオオオオオオオ！ なにやっつてんだ俺エええええええええええ！」

どうやらまだ安定していなかったらしく、目の精孔が閉じてしまつたようだった。

「ううっ……次のときに備えて、住処に鏡置いとこ」

それからしばらく、オーラは見えたり見えなくなったりした。しかし、だんだんと見える時間は長くなつていき……。

俺は全身を調べ終えた。

「……あー、マジかあ」

鏡を覗き込みながら唸る。

結論から言うと、やはり俺は刻印されていた。覚悟はしていたが、事実だとわかるとやっぱりくるものがあった。

「なんで俺がこんな目に。運が悪いにもほどがある……」

ただ、幸い……といつていいのかはわからないが、刻印されていたのは太陽（プラス）だけだった。ただ、その刻印にもすこし気になることがあった。

「よりによつて額、か」

鏡に映る自分の顔。その額にくつきりと十字の刻印が浮かんでいるのだ。……そう、まるでクロロのように。

しかも、オーラが見えるようになってわかったが……こういう人物はほかにもいた。決して多くはないが。

これがなにを示しているかという……。

「……全然わからん！」

情報が足りなさすぎる。俺は思考を放棄した。

ともかく、本来の目的は果たしたのだ。

「長かった……」

数えてみると、かれこれ半年が経過している。最初の3ヶ月も合わせると、9ヶ月かかった計算だ。

ズシが3ヶ月でやったことを、9ヶ月。早いのか遅いのかはわからない。けれど、悪環境で師匠もなしの状況だ……ここまでこられただけ得上出来だと思った。

「これからどうするべきか」

どうしたいかといえば当然、この刻印を消したい。問題はそのためになにをすべきか、だ。

刻印を消す方法は2つある。長老に解除してもらうか、除念してもらうか。

前者はありえない。

刻印した張本人に『解除してくれ』なんて……殺してくれと言っていけるようなものだ。できることなら、長老にはもう一生会いたくない。

となると後者なのだが……そうになると、急がなければならない。

もし長老が死んでしまえば、刻印は死後の念となりかねない——念が強まって、除念は絶望的になりかねない。

なにせ死後もクロロの本に残るほどの強い念なのだ。そうなる可能性は高いだろう。

しかし、除念師はとても希少だ。

作中でも登場したのは、G・I。編で登場したアベンガネ、キメラⅡアントであるヒナ（ボテ腹かわいい）、そしてハンター協会唯一の除念師（ゴンを除念できなかった人）の、合わせて3人だけ。

ヒナに至っては、生まれるのはまだ10年以上も先の話。

加えて言えば、死後の念を除去できるような除念師は世界で10人といない、と言われている。作中に登場した人数でいえば、驚きの0だ（ゴンを除霊したナニカは例外）。

となると……。

「——流星街を出す」

それしかない。ここにいる限り、除念師の情報は決して集まらない。

そのためにすべきことはひとつ。

「——資金集め、か」

結局、金かア……。この地獄から抜け出すには、どうしたって金がいる。

気合を入れなおすのに要した時間は、10秒。

「よし……やるかア！」

そうして俺の目標は次の段階へとシフトした。

そして俺は——。

——ゴミ山で瀕死の少女を拾ったのだった。

……え？　なんで？

シヨウジヨ×ノ×シヨウジヨウ

——時間はすこし巻き戻る。

資金稼ぎに乗り出した俺だったが、それに伴って生活も変化した。これまでは必要最低限のゴミを集め終わったら、すぐ住処に戻っていた。すこしでも多くの時間を修行に充てるためだ。

それが日中、ずっとゴミを集めるようになった。

驚いたことに、一日当たりの稼ぎは以前の3倍になっていた。下限の1キロに達しているかを心配していた日々がウソのようだった。

バテるのは変わってないが、かつてとは効率が段違いなのだ。

なにせ力がある。大きくジャマなゴミを退けて、その下を漁ることができるし、一度に大量のゴミを持ち運ぶことができる。

そうして稼いだ金を、俺は貯金……ではなく、まずは環境を整えることに使った。

いわゆる必要経費というやつだ。

第一にゴーグルを買った。それを常時、額当てのように身につけるようにした。

これでうっかり触られて爆死、という事態は避けられるだろう。なぜゴーグルかと問われると、これくらいの分厚さがあれば”番いの破壊者(サンアンドムーン)”が服越しに使えたとしても防げる……かもしれない、という願望だ。

それから個室を手に入れた。さすがに、あのままゴミ山の中で寝泊まりを続けるのは避けたかった。あの環境では、身体が強くなったとはいえ、いつまた体調を崩したっておかしくない。

ゴミ山の外にあり、かつ自分ひとりが寝起きできる住処は必須だった。

こうして俺は、1ヶ月かけてようやく貯金できる環境を整え終えたのだった。

そして翌日、意気揚々とゴミ拾いに出たときのこと。

「おわっ……っつと」

ゴミに引っかけてしまい、靴が脱げてしまう。靴はコロコロと

ゴミ山を転がり落ち、止まった。

ケンケンしてその場所まで降りていく。

「明日は晴れだな。なんちって……げっ!？」

そうして俺は発見してしまふ。

——ゴミ山の陰に少女が倒れていた。

「……マジ、かア」

死んでは……いないらしい。苦しそうに浅い呼吸を繰り返している。

……なんとか見て見ぬフリはできないものだろうか？

正直言つて、俺には他人を構う余裕なんてない。それにここは流星街だ。俺が拾わなくなつてだれかが拾うだろう。

俺は少女に背を向け……。

「うっ……」

少女のうめきが耳に届いた。

「……あー、もう！ 拾えばいいんだろ拾えば！ コンチクシヨウ！」

俺は少女を担ぎ上げ、自分の住処へと連れ帰つた。

おそらくゴミ山の汚染にやられたのだろう。なら、あそこから離れて安静にしていれば、そのうちマシになるはず。

それから俺は、かいがいしく少女の世話を焼いてやつた。

定期的に濡れ手ぬぐいを変え、汗をかいていれば拭き、口元へ水を差し入れてやつた。そのために、わざわざ煮沸した水まで用意した。

「さすがに、病人にあの水をそのまんまは飲ませられないしなア」

流星街は意外なことに、ところどころ水道管が通っている。

俺たちは普段、その割れ目から垂れ流されている水を汲んで、生活用水として使用している。といつても、ほとんどドロ水みたいなものだが。

……そうこうしているうちに一夜が明けた。

朝日の差し込む中、さすがに俺も限界がきて、うつらうつらと船を漕ぎはじめ……。

「んっ……」

身じろぎの気配。俺はハッと目を開いて、少女を覗き込む。少女は

ゆっくりと目を開き——その、瞬間だった。

俺は見た。少女の全身から——精孔からオーラが噴き出すのを。

少女の細腕には似つかわしくない力の込められたその手が、俺に突き出されていた。

「——つぐ!?!」

間に合ったのはほとんど偶然だった。精孔を開いて、首元に掲げた腕が少女の貫手を防いでいた。痛ってエ!?

少女はすぐさま臨戦態勢に構え、次の一撃を用意する。俺は転がるように距離を取った。バクバクいう心臓を押さえ、思わず叫ぶ。

「なっ、なにしやがんだ!?! 命の恩人に対して!」

「……」

少女は言われてから気づいたのか、あたりをきよろきよると見回した。

それからゆっくりと身体の緊張を解いた。

「……ごめん、早とちりした」

ちなみに俺は解かない。だって絶対、また攻撃してくるじゃん! 絶対、油断を誘うための罠だもん! 知ってるんだ俺は!

少女はどこか呆れた様子で言う。

「いや、もう攻撃しないから」

「……本当に?」

「本当だって」

「本当の本当に?」

「……ウツザ。死にたいの?」

「やっぱり殺すじゃん!?!」

少女は嘆息し、腰を下ろした。それからそっぽを向いて言う。

「助けてくれて……ありがと」

「……どういたしまして」

「アンタも座ったら?」

俺はすこし悩んだが、ゆっくりと少女に近づき、手の届かない距離に座った。正直まだ恐いが、このままじゃ話が進まないのは事実だった。

というか、今気づいたけど……。

——この子、この年で精孔を開けるのかよ!?

少女は俺と同じ年か、それよりすこし下に見えた。おそらくは5、6歳。

たしかに、念は努力しだいでだれでもできるといふ。少女に精孔が開けたって不思議ではないのだろう。でも、俺が死に物狂いで修行して、原作知識使つてようやくできるようになったことだぞ!? それを……。

はア……ほんと勘弁してほしい。でも、まアいい。どうせもう関係ないことだ。

助け終わったことだし、少女にはさっさとここを出て行ってもらい。

「アンタの名前は?」

やめてくれエ! 変に恩義感じなくていいから! 関わろうとしなくていいから!

俺は誤魔化すように聞き返す。

「あー、えー……人に名前を聞くなら、まず自分からじゃない?」

「……チツ」

——ヒエ!?

反射的にビクツと身体が跳ねる。恐エよオ……恐エよオ……。

少女はポリポリと頭を掻いて、答えた。

「――」

「……え?」

俺は聞き間違えたのだろうか? いやいや、だって、そんな、まさか。

少女はイラ立ちを募らせたかのように、大きな声で言った。

「だから——あたしの名前はマチだっつってんだよ!」

1984年12月——この世界で目覚めてから10ヶ月が経った今日この日。俺はついに遭遇してしまったらしい。

H×Hのメインキャラクターに――。

マチ×ト×マーティー

目の前に座る少女——マチを見る。

なぜ気づかなかったのだろう。いわれてみれば、髪はボサボサで薄汚れているもののピンク色をしている。それに着ている服も（これもボロボロだが）どこことなく和風だ。

「マジ、かア……」

「なに、アンタ。あたしの名前に文句でもあるわけ？」

「め、滅相もない！」

「……まあいいや。で、アンタの名前は？」

「えっ」

問われて気づく。俺の名前って……なんだ？

母親は俺を産んだあと、間もなく捨てた。名前なんて一度も呼ばれたことがない。というか、つけてすらいなかっただろう。

このゴミ山で暮らすようになってからも、必要なのはゴミを拾う手足だけで名前はいらなかった。

「あたしに名前を訊ねたクセに自分は答えないうっての？」

「ち、ちがう！ 答える！ 答えるから！」

名前……名前!? えっと、なんだ!?

なにか答えないと殺されかねない！ 相手はマチなんだぞ!? 将来、旅団メンバーとなる冷酷な殺人者……いや、もしかしてすでに旅団のメンバーかもしれないが。ともかくそんな相手なのだ。

悩んだ末、口から出たのは——。

「——マーティー」

「あん？」

「俺の名前はマーティー……ストウだ」

最後にプレイしていたTRPGでのキャラネームだった。

一瞬、クロロルシルフルの名前も頭をよぎったが、もし旅団が結成済みだとしたら……団長の名を騙ったとして、この場でマチに殺されかねない。

あとの候補は前世の本名だが……それは絶対に言いたくなかった。

だって、殺人鬼に自己紹介したいか!? 自分を殺すかもしれない相手に本名言いたいか!? 俺は絶対にイヤだよ!

「変な名前ね」

お前に言われたくねエえええええええ! だってマチの苗字、コマチネだぞ! マチココマチネ! だってもうそれ……ほとんどコマチチじゃん! 絶対、H×H読んだやつ全員、一度は思ってたぞ!

なんて言ったら殺されかけないので、俺は「はは……」と愛想笑いを返した。

「それじゃあ、マチさん。俺も働かなくちゃいけないから、そろそろ……」

「マチでいいよ。あたしもマーティーって呼ぶから」

「あ、はい……それで、そろそろ出ていっ——」

「マーティー、ちよつとお願いがあるんだけど」

俺の話を聞けエえええええええ!

「じつはあたし、今日ここに来たばかりで行くところないんだよね」

勝手に事情を説明しないで!?

「でき、しばらくここに泊めてくれない?」

お前みたいな死亡フラグを泊まらせられるかアあああああ!

「いいでしょ?」

「ハイ、イイデス」

俺は弱かった……。

うわアあああああん! 絶対にヤダよオおおおおお! そう叫んだところで、意地だけでは絶対越えられない現実もあるわけ……。

こうして、俺とマチの奇妙な共同生活がはじまった。

「で、仕事ってなに? 手伝うよ」

「ゴミ拾い……」

「ゴミ拾い……?」

「あー、うん。金になるゴミを拾って、買い取ってもらうんだよ」

「ふーん……?」

そうして俺とマチはゴミ山へと向かった。

その途中でパンとスープを買い、朝ご飯を済ませた。マチは「なにコレ……ほんとに食べ物？」と苦い顔で咀嚼していたが。まあ気持ちはわかる。マツズイもんなアそれ……。

それからふたりでゴミを拾いはじめた。最初こそ「ほんとにここに手をつ込むの……？」とマチは眉を顰めていたものだが、あつという間に理解し……10分も経過するころには、俺より効率よくゴミを集めるようになっていた。

あの、俺……生まれてからゴミ拾いずっとやってるベテランなんです。

これだから天才はよオ……。

「泣いてんの？」

「泣いてなんかないやい！」

それと、マチを見ていて気づいたことがある。

マチは精孔を開いてゴミ拾いに勤しんでいるのだが……どうにも、精孔から出ているオーラと、垂れ流されている——立ち昇っているオーラの量が吊り合っていない。後者のほうが少ないのだ。

すなわち、完全ではないものの『纏』ができている。

そんなマチに張り合おうとした俺が、結果どうなるかということ……。

「……ゼエっ……ゼエっ」

「アンタもうちよつと体力つけたほうがいいんじゃない？」

こうなる。

最終的にマチが稼いだ金額は、俺の3倍にも達した。マチのほうが効率よく集められる上、スタミナもあるのだから当然の結果。なのだ……。

自分の稼ぎを見下ろす。

あ、ダメ……心折れそう。

マチのを見たあとだと、ちよびつとにしか見えない。

トホホ、と肩を落としていると。

「はい、じゃあ」

「えっ？」

「なについてお金だけど。住まわせてもらってるお礼。それに……命も助けてもらったしね」

「マチ！ マチちゃん！ いや、マチさま！」

「な、なによ」

「いつまでも俺の家に泊まっていいからね！ ありがとう……ありがとう！」

「な、なによ……ちよつと、手握らないで。近いっての。このっ離せ……あーもうっ！」

マチに蹴りを入れられたが……それも気にならない。

ふふふふ……。マチが毎日手伝ってくれるならば、予定よりずつとはやく目標の金額まで貯まる。流星街を出られる日もそう遠くはない。ほんと、マチさままだ！

「ほんとにありがとうね！」

「あーはい、もうわかったから……。で、このあとは？」

「そうだな……あ、マチお風呂入りたくない？」

「えっ、お風呂があるの!?!」

マチは俺の言葉に目を輝かせた。

ニユウヨク×ト×シユウトク

風呂に到着した瞬間、マチは叫んだ。

「海じゃん!?!」

「……え?」

一瞬、なにを言われているのかわからず首を傾げ……ハツとする。
「これ海だ!?!」

目の前にあるのは汚い海岸。

完全に無意識だった。俺の中でいつの間にか海⇨風呂になっていた。慣れって恐いわ……。

「このつアホー! ほんつとアンタ……このつ、久々に風呂に入れるとばつかり……!」

「いや、ほんと悪かったって。うっかりしてた。でもここしかないしさ」

言いながら俺はぺいっと服を脱ぎ捨て全裸になった。

「つ!?! ちよ、ちよつと! 人前でなにしてんのよ!?!」

「え? いや、だって風呂……じゃなくて海に入るんだから、服を脱がないと。濡れるし」

「そうじゃなくて……あアつ、もう!」

マチは顔を背け、しかしチラっチラつとこちらを盗み見る。

あー、そうか。5とか6歳つてもう裸が恥ずかしいとかって感覚あるのか。それにマチはそういうのに耐性あるイメージだったけど……そうだな。今のマチはまだ子供だもんな。

「じゃあ、はいこれ。俺の服」

「え?」

「それ濡らしていいから。着たまま入んな」

マチがキョトンとする。そんなに変なこと言っただろうか?

「……ありがとう」

マチは貸したシャツを頭からすっぽりと被った。

「……変な匂いがする」

「ゴミの臭いだよ!?!」

俺の釈明をスルーして、マチはシャツの隙間から和服をするりと脱ぎ取った。

マチがちゃぷんと海に足を浸けた。こちらへと近づいてくる。太ももまで浸かったところで、ゆっくりと腰を下ろしていく。

シャツが濡れ、マチの身体にぴったりと張りついた。起伏のすくない身体のラインが浮き彫りになっている。シャツが透け、肌色が映っていた。

と、波に煽られてシャツの裾がまくれあがる。

「きゃっ！」

マチは慌てて裾を抑え込み、ぎぶんとしゃがみこんだ。

それから、「見た？」とでも問うように、じーっとこちらを見た。

そんなマチの様子を見ていた俺は……マジで平常心だった。あー、子供は反応が素直でかわいいなー、と微笑ましいものを見る気持ちだった。

絵や描写次第でいろいろカバーできる2次元ですら、この年齢の子は厳しい。それが3次元——現実となれば……言うまでもない。……まア、2次元でえっちなことをしてるキャラクターは全員18歳以上ですけどね！

あーでも、惜しいなア。あと10年経つてればなア。せつかくマチの水浴びシーンなのに……いや待てよ？ 成長した姿を想像すればワンチャンある……か？

イメージしろ。イメージ……イメージ……。

「うーん……」

「ねエ、マーティー」

「はいいいいっ！」

え？ もしかしてバレた!? 俺そんな下卑た顔してた!? 悪い想像なんてしてないです！ ていうか、やっぱこの年齢じゃムリありません！ 本当ですから許して!?

心臓をバクンバクンいわせていると、マチはあごまで海に浸かり……ほつりと訊ねてきた。

「……アンタって何歳？」

「え」

やっぱり児ポ法?! 児ポ法ですか!?

「な、何歳だろ。6歳……いや、そろそろ7歳くらいなのかな」

「誕生日は?」

「さア? 物心つく前に捨てられたし」

「……そ」

「そういうマチは何歳なんだよ」

「6歳」

へー、6歳かア……やっぱりアウトだな。

「それで、なんで急に年齢を?」

「いや……なんだか、ちよつと。アンタが見た目より大人っぽく見えただから……気になっただけ」

——え?

マチは言うだけ言って、ぶくぶくと顔を沈めた。

俺は驚きのあまり声すら出なかった。

——もしかしてマチは……俺が転生者だと気づいたのか!?

実際、原作でもマチの勘はよく当たった。というか、作中的中率100パーセントじゃなかったっけ。

油断できねエ……。俺は引きつった顔を誤魔化すように、ざぶんと海に潜った。

そのあとは、いつもどおりにパンとスープの晩ご飯。

だが驚くなかれ。なんと今日は奮発して肉と野菜の入ったスープなのだ! ……はい、どうでもいいですねそうですね。

そして、夜になれば……。

「なにしてんの?」

「修行」

「ふうん」

俺は座禅を組み、心を落ち着けた。

すぐに精孔が開いた。ここまではもうスムーズにできる。問題はここからだ。

1ヶ月ほど前から、念の修行は第2段階に入っていた。

精孔を開いたことでオーラがあふれ出す。しかし、このままの垂れ流しでは……あつという間にバテてしまう。なので、それを身体の周囲に留める必要がある。

——これを『纏（テン）』と呼ぶ。

目を閉じてイメージする。オーラが血液のように全身を巡る様子を。頭から肩、手、足……そして逆側へ。

修行の様子を見ていたマチが言った。

「アンタ……センス悪っ」

「っせーな!? わーってるよ!」

思わず反応してしまう。

そのせいで集中が途切れオーラが発散する。また1からやりなおしだ……。

「アンタ、それでよくそこまで精孔開いたよね」

「うっ……。まア、死に物狂いだっし……」

「ふーん……」

言つて、マチが立ちあがる。

「見てな」

マチが身体の力を抜き、目を閉じた。

全身からオーラが噴き出す。この時点で俺は圧倒された。なんて……オーラの量だ。俺の倍はあるんじゃないか……？

おそらく、さつきまでは精孔を絞っていたのだろう。まだ『纏』が完全にはできないから。

「ふー……」

呼吸にあわせてオーラが全身を巡りはじめる。ヤカンから吹き出す蒸気みたいに立ちのぼっていたオーラが、ピタリと止まる。

マチが目を開いて、こちらを向いた。

「ま、こんなもんかな。つってもこの状態にするのに時間かかるし、動いたら崩れるけど」

「いや、すげエ……」

「てかアンタ、よくそんなので精孔開けられたね。だれから教わった

の? よっぽど先生に恵まれたんじゃない?」

「だからというか……本から?」

「……え?」

マチが目を丸くする。

あつ、やべ。思わず素で答えてしまった。原作、と言わなかっただけマシか?」

「じゃあアンタ……独力でここまで?」

「あーつと……」

言い訳が思いつかない。

「答えたくないなら、まあいいよ。でも、はっきり言うけど、それじゃいつまで経っても念の習得なんてできやしないよ」

「あー、うん。それでも……ひとりでやるしかないからなア。教えてくれる人なんていないから」

「……てあげる」

「え?」

「……あたしが教えてあげるって言うてんの。一応、あたしはきちんと手ほどきは受けた身だし……アンタよりはマシでしょ」

「い、いいのか!」

「でもあんま期待しないでよ。あたしだって『纏』すらちゃんどできてないんだから」

願ってもなかった。俺は期せずして念の先生を手に入れてしまったのだった。

「ほら、もう寝るんだからそっち退けて。寝てる最中に変なことしたら……殺すから」

「やるわけねーだろ……」

だつて死にたくないもん。

「……」

まだ疑われているのか、マチの視線に晒されながら寝床についた。

そこからの月日はあつという間に過ぎた。

昼はゴミ拾い、夜はマチに見てもらいながら念の修行。俺の修行を

見る傍ら、マチ自身も鍛錬に勤しんだ。

そして、マチが完全に『纏』を習得し、俺もまたモドキではあるが『纏』ができるようになったころ――。

「――資金が、貯まり切った」

ついに、このゴミ山を抜け出せる時が訪れたのである。

ゴカイ×ト×コウカイ

年が明け、俺が目覚めて1年が過ぎ、さらに月日が流れた。

ここまで長かった。しかし、こんなにはやく資金が貯まるとは思わなかったし、こんなにスムーズに念が上達するとも思っていなかった。

すべてはマチのおかげだ。

「……正直、最初アンタの修行内容を聞いたときは、ほんとどうしたもんかと思っただけだね」

「いやア、その節はほんとうにお世話になりました」

あれはマチと共同生活がはじまって数日が経ったころ。俺の修行を見てくれていたマチが『んん……う』と眉を顰め、問うてきたのだ。

『ねエ、ちよつと。アンタ今までどんな修行してきたの?』

『どんなって……普通だけど。まず精孔を開いて、そのあとは「纏」の習得を……』

『はアあああああ!』

『え? ……もしかして、なにかおかしかった?』

『おかしいもおかしい。大間違いだよ! はア……1から全部聞かせな』

『は、はい……』

俺はマチの圧に負けて、自分がやった修行の内容をすべて話した。

マチはこれでもかと大きく嘆息した。

『ほんつと、アンタは……もう。まず、確認だけ……アンタ、オーラを知覚せずに精孔を開こうとしたわけ?』

『え? でも目の精孔を開かないとオーラは見えないんじや』

『アホー! 自分の身体を包んでいるオーラを実感できるようになるのが、先に決まってるでしょ!』

『……あつ!』

言われて思い出す。そういうえばウイングもそう説明していた。完

全にうつかりしていた。

いや、俺もなんか忘れてる気はしてたんだよねー……ホントだよ。

『まあ、それでホントに精孔開けちゃったんだから、すごいというか……すごいアホというか』

『いやア……それほども』

『寝めてないから。あと、真っ先に開いたのがお腹——というか内臓の精孔だったあたり、よほど差し迫ってたんじゃない？　ていうか、病死しかけてたのかも』

『え』

サアアアと血の気が引く。

『ようやく自分がどれだけ無茶してたか自覚した？』

『(コクコクコクコク)』

『結構。それに、変な精孔の開き方したせいだろうね。全身の精孔の開き方一定じゃない』

『それってマズいのでは』

『さア？　でも、「纏」習得には苦労するんじゃない？　知らないけど』

『やっぱマズいじゃん!』

『ていうかアンタ、その「纏」の修行に関してもいろいろと誤解してるから』

『そ、そんなはずは』

さすがにそれはウソだろう。

だって俺の知識は原作知識。やっていることも原作のとおりだ。

……さつきみたいな抜けがないとは言わないが。

『いや、マジだから。アンタ、精孔を開くのと「纏」の修行とを別々にやったんだよね?』

『そりやそうだろ。精孔を開いてから「纏」を——』

『ちがうから。「纏」を習得する過程で精孔を開くの。よりスムーズにオーラを巡らせられるように——留めておけるオーラの量と相談しながら、ね』

『……いやいや、そんなはずは』

『マジだから。ていうか、あんなにバテまくっておかしいとは思わな

かったの？ それに、身体に留めずオーラをドバドバ垂れ流して……非効率だと思わなかったの？』

『うっ!?!』

『でも……ようやく納得したよ。おかしいと思ってた。どうりでオーラを留めるのがヘタなわけだ。それにしよつちゆう精孔を開いたり閉じたりするし』

『いや、でもマチだつて精孔を閉じて……』

『あたしは身体を休ませるためにそうしてたの』

『……マジで?』

『マジマジ』

記憶を探る。マチの説明に原作との矛盾は……思い当たらなかった。ということは俺の勘違い——解釈ちがい!?

だとしたら、俺はなんでこんな誤解を……?

『あ、でも。聞いたことあるかも』

『ん? なにを?』

『いやね、短時間で念を習得させる場合は、ムリヤリ精孔を全部開くんだった。そのやり方なら必然、精孔を開いたあとに「纏」を習得するつて順序になるだろうね』

それだアああああああ!!?

俺は得心する。ムリヤリ精孔を開いたゴンとキルアの修行と、記憶がごっちゃんになっていたのだ。

『……もしかして俺、めっちゃんやらかしてね?』

『後悔したつて、やつちやつたもんはしょうがないでしょ。諦めて精進するんだね』

『トホホ……』

——回想終わり。

今となつては懐かしくすらある。いやア、時の流れつてのははやいもんだ。あんなだった俺が、今では『纏』モドキができるまで成長しているのだから。

まア、俺が『纏』モドキだと思つてた“垂れ流されるオーラが絞ら

れている状態”ってのは、普通に『纏』を習得した人たちのデフォルメ状態でしかなかったわけだけど。

「なに、やりきったみたいなの顔してんの？ アンタそれさえも動いたら乱れるでしょうが」

「うっ……がんばりまーす」

「よろしい。それじゃ、今日もゴミ拾い行くよ」

「……あっ、マチ」

「どうかしたの？」

「その……いや、なんでもない」

「そっ？」

俺はマチの背中を見ながら、ひっそりと嘆息する。また言い出せなかった。

目標額が貯まってから、すでに3日が経過していた――。

センパク×ニ×センニユウ

ひと仕事を終えて、風呂（海）へ。マチもさすがに慣れたもんで文句は言わない。文句は言わないのだが……。

「はやく脱いで服貸して」

「あいよ」

シャツを脱いで手渡す。マチはそれを頭からすっぽりと被り、その合間から自身の服を脱いだ。

……ん？ あれ？

今さら思ったけど、これおかしいよね？　なんで俺、毎回シャツ貸してんだ？

「なアマチ、もう自分の着替えあるんだからそれ使えば……」

「は？　なんであたしの服を海水に浸けなきゃいけないの？」

「アツハイ、ソウデスヨネ」

我が家の稼ぎ頭には歯向かえず、唯々諾々と従う……相変わらず弱エ俺。まア、マチの稼ぎを思えばこれくらい安いもんだが。

そんなマチはといえば、借りたクセにあいかわらずニオイが気になるらしく、くんくんと鼻を鳴らしていた。……はいはい臭くてスイマセンね。でもそれ、繰り返し言うけど俺のせいじゃないからね？

「……はア」

なーんて、いろいろと余計なことを考えて思考を逸らそうとしたが……ダメだな。ただの先延ばしだ。

やつぱ、言わないとなア。でもめちやくちや言い出しづらい。いつそ、なにも言わずにひとり流星街を出——たら殺されるな。うん。

言わなきゃ。でも言えねエ。言えねエよ……。

『俺は流星街を出ていくね！　お金は全部持っていくよ！　今まで俺のために稼いでくれてありがとう！　バツイビー！』

——なんて、言えねエよオオオオ!?　絶対殺されるじゃん！

たしかに金は全部、もう俺がもらったモンだ。『好きにすれば？』とマチからも了承を得ている。でもそれは俺が流星街で暮らしているという前提の話で……。

——はア。なんとか円満に別れる方法はないものか。

……え？ マチと別れるのが寂しかったんじゃないのかって？

いやまあ、それなりに長い時間、一緒に過ごしたし……愛着はある。念を教えてくださいました恩義もある。けど、それとこれとはべつだ。資金も1人分しかないし。

もちろん、2人分の資金を貯めてから出る、という選択肢もないではない。

しかし、それなら俺が先に外へ出て稼いで、その資金でマチを連れ出すほうがはるかに合理的だし、早い。外——具体的には天空闘技場ならここの何十倍……何百、何千倍という金を一日で稼げるのだから。流星街に一日でも長くいれば、それだけで大きな損失なのだ。

——なにが合理的かくらいちよつと考えればわかる、はずなんだ。

「……ねエ、マーティー」

「ん？ なに？」

「あんたさ——ここ最近ずつとなに悩んでんの？」

「……え？」

マチがまつすぐにこちらを見ていた。

とつさのことで、俺は答えられない。

「え、えーつと、なんのこと……」

「隠すのはやめな。かれこれ半年の付き合いだよ。それくらいわかる。……で、なに？」

「……あー」

これは誤魔化すのはムリだな。どのみち話さなければならなかったこと。いやむしろ、俺が話せないことを察してマチのほうから切り出してくれたのかもしれない。それに……どのみち今日がリミットだった。

しかし、なんと説明したものか……。なんと説明すれば、殺されずに済むものか。ブルブル……。

「あたしに言えない内容？ たとえば——額のソレが関係してるとか」

「……あー」

やらかした——相変わらず、なんて勘の冴えだ。

すぐに答えればよかった。いや、でも……関係してると考えない方がおかしいか。俺が額を気にして生活してるのはマチにはお見通しだったろうし。

しかし、このタイミングでそれを聞くかね？　これまで一度も尋ねてこなかったのに。

どちらにせよ、額くほかなかった。

「ああ、関係してる」

「そう。で、ソレなんなの？」

「これは……、あつ」

説明しようとして、言葉に詰まる。

刻印があると爆発しかねない、なんて情報——番いの破壊者（サンアンドムーン）の能力をなんで俺が知ってるんだ？　しかし、知らないと答えると今度はこれを消したいと思ってる理由が説明できなくなる。

「答えられないわけね。いいよ、じゃあ答えなくて。で——アンタはどうしたいの？　あたしはどうすればいい？」

マチは見透かすような目でこちらを見ている。ここで誤魔化すなんてこと、俺にはできなかった。まっすぐに向き合い、告げた。

「——俺、流星街を出るよ」

「……そ、う」

マチはかすかに目を大きくし、それから頷いた。

俺は正直に話した。

「そのための資金に俺とマチで貯めた金を使う」

「前も言ったけど、もうアンタのものだよ。好きにしな」

「資金は1人分しかない」

「だろうね」

「……マチっ、俺は——」

「——それで、いつ出るの？」

マチは俺の言葉を遮り、訊ねた。

つ……！ 俺はなにを言おうとした!? 言い訳か!? ながさめか!?

俺はかぶりを振った。感情が高ぶってしまった自分を諫める。マチがそうするように、努めて淡々と答えた。

「明日にでも」

「……そ。じゃあ今晚中に準備しないとね」

「……あア」

それから淡々と話し、淡々と準備をした。

その日の晩、俺たちは……出会ってはじめて念の修行をしなかった。

次の日の朝は、すぐに訪れた。

* * *

「——あの船に潜り込めればいいの?」

「あア、そうだ」

視線の先にあるのは海岸に停泊する大型船。そこからは次々とコンテナが搬出されている。中身はもちろんゴミ。毎日、入れ代わり立ち代わり流星街にゴミを捨てに来ている船の、一艘だ。

かなりの大型船。忍び込めさえすれば、あとはバレようがないだろう。忍び込むのも、今の俺の身体能力ならそう難しくはないはず。

「べつに船員の注意を引かなくたって」

「アンタは肝心なところで……いや、全体的に抜けてるからね。これくらいのはフォロージャまだ心配なくらいだよ」

マチは俺が流星街を脱出する手伝いを申し出てくれていた。うーん、反論できねエ! ……だって、失敗した記憶しかねーもん。

「お世話をかけます……」

「ほら、もう行きな」

「あア。……あつ、マチー!」

「なに?」

「いや、その……家はそのまま使い続けてくれていいから」

「昨日聞いた」

「そ、そうだったな。……あー、シャツ何枚か置いてきたから水浴びするときは使ってくれ」

「知ってる。準備するの手伝ったから」

「そ、そうだよな」

「……はア。アンタがあたしの心配してどうすんの。逆でしょ?」

「そう……だよな」

まったく、その通りだな。マチならひとりでも問題ない。俺より稼ぎ上手だし、強い。そして、やがては幻影旅団に入るのだ。

俺は背中を向けた。

「今まで……ほんとうにありがとう」

「……ん」

ゆっくりと歩き出した。マチとの距離が開いていく。

そのとき……ざわり、とした感覚が背筋を駆けあがった。ひとつの妄想が頭に浮かんでいた。

現在は1984年の4月だ。仮にクロロが13歳のときに幻影旅団を結成した、という情報が正しいとすると……早ければ来年には旅団が結成されることになる。

当然マチも、そこに所属することになる。でも、今なら。もし今ここからマチを連れ出せば――。

「――マチは人殺しをせずに済むんじゃないか?」

それは紛れもなく、悪魔の発想だった。

マツテル×ト×マツテテ

それはまさに悪魔の発想だった。

運命を捻じ曲げる——未来を知るラプラスの悪魔にしかできぬ所業。

「ここで俺がマチを流星街の外に連れ出せば、旅団に入らなくて済むんじゃない？ ただの女の子として幸せに暮らせるんじゃないや……？」

——なにをバカなっ！
かぶりを振る。

旅団に入るのが不幸だなんてだれが決めた!? むしろ旅団こそがマチの性に合った居場所。マチの幸せを俺が勝手に決めるなんて、おこがましいにもほどがある！

そしてなにより——俺に原作を変える権利なんてあるのか？ そんなことをして、未来にいったいどれほどの影響がある!? 取り返しのつかない事態を引き起こすんじゃないのか!? その責任をお前が取れるのか!?

しかし、頭の中ではマチを連れ出す計画を立てている。

先に出て、マチを連れ出す資金が貯まり次第すぐに迎えに来る？

いや、ダメだ。旅団の結成が来年だとしたら、出会うのはもつと前でもおかしくない。クロロたちとマチがまだ出会っていない、今じゃないとダメなんだ。

……そうだ。資金なんて道中で貯めればいいじゃないか。俺たちは子供の上、国籍も身分を証明できるものもない。非常に難しいだろうが不可能でもない。

マチを連れて行こう。俺はあいつに……俺は、あいつと——！
振り返り叫んだ。

「マチ！ 俺と一緒に——」

「——あたしは行けない」

一緒に行こう——その言葉を最後まで言い切ることはできなかつ

た。

「アンタに事情があるように、あたしにも事情がある。だからここに
いる。今すぐにごくを出ることは……あたしにはできない」

「……は、はは。そうか……そう、だよな。そりやそうだ。考えてみ
りや、当たり前のことだ」

マチにだって事情はある。でなけりやゴミ山にボロボロで倒れて
いるはずもない。

「わかったら、さっさと行きな」

マチに促され、俺はゆっくりと歩き出し――。

「――でも、誘ってくれてありがとう」

小さく声が聞こえた。

ハツと振り返る。もうそこにマチはいない。気づくと俺は叫んで
いた。

「必ず！ 必ず迎えに来るから！ 戻ってくるから！ だから――
待っていてくれ！」

待ってる、ではなく、待つて。なにかを考えたわけじゃない。自
然とそう言葉が出ていた。

返事はなかった。だが、届いたと思った。

すこしだけ……10秒だけ目を瞑り、それから船へと歩き出した。

船員には遭遇しなかった。気を引いてくれているのだろう――ど
こからマチの声が聞こえていた。俺は船に潜り込み、貨物に紛れ
た。やがてゴミを捨て終えたのか、船と陸を繋いでいたランプウェイ
が回収された。

船がゆるやかに動き出した。

俺は貨物の合間から流星街を――故郷を眺めていた。

流星街での1年2ヶ月。マチといなかった時間のほうが長い。な
のに思い起こそうとすると、マチとのできごとばかりが頭に浮かん
だ。

俺はマチに事情を訊ねることができなかった。その権利がなかつ

ただ。

だれが言えよう？ 自分は事情を隠しておいて——相手の事情は聞かせてくれ、なんて。

「いつか……マチを迎えに来たそのときは、話せるだろうか？」

流星街をあとにする——これが正しい選択だったのかどうかもわからない。ただ、船はもう出てしまった。できることは一日でもはやくお金を貯め、マチを迎えに行くことだけ。

俺はゆっくり瞼を下ろした。

体力を温存しよう。船が着いたらすぐに動き出せるように——。

* * *

——1週間後。

船が港に到着した。俺はランプウェイが渡されると、船員の目を盗みすぐさま船を脱出した。急げ……急ぐんだ！ じゃないと……！

「げえええええ！……オロロロロロ！」

吐いた。

物陰で座り込み、ヒイヒイ悲鳴をあげる。

「な、なんとか間に合った……うつぷ。マジで船キツかったよオ……」

ある程度オーラが操作できるようになって、身体も頑丈になったから大丈夫——と油断していた。実際、途中までは大丈夫だったんだが、疲労でオーラの流れが悪くなってくると……。

「ホント、ここまでもってよかった」

もし船内で吐いてしまっていたらと思うと……ブルルッ。

吐瀉物の臭いでバレて捕まるなんて、冗談じゃない。

「しかし、そうかア……もうここ流星街じゃないんだなア」

潮風に身を任せる。

思わず周囲の景色に見とれていた。海が澄んでいる。港がまばゆい。それに海の匂いがする。

ここは港でもゴミ捨て船が停泊するような区域——しいていえば工業港に近いだろう。だから、特別きれいなわけじゃない……はずなのに、なにかもがあの茶色と灰色で塗りつぶされた世界とはちがう。

あまりに色鮮やかで、目が痛い。匂いだってそうだ。
あまりの情報量に頭がクラクラする。

いつの間にか、俺はあそこでの生活が馴染んでしまってたらしい。
「いつまでも感傷に浸ってる場合じゃないな」

あまりここに長居して、見つかっても困る。

俺はあたりを見渡しながら、歩きはじめた。

「バンダー港……か」

あちこちに『バンダー』の文字が見えた。

テキトーに船を選んで辿り着いた港——では決してない。狙って
この船に潜りこんだのだ。ここバンダー港は、天空闘技場にもっとも
近い港なのだ。

あの日——ここへの船が出る前日にマチが話を切り出してくれた
のは、もしかしたら運命だったのかもしれない。

いや、ちがうな。マチはきつと気づいていたのだろう。

「……勘、かなア」

あるいは、この地域について調べているのがバレていたのか。

天空闘技場がどこの街にあるのか、原作に記述はない。どころか、
国の名前も大陸の名前も出てきていない。

そのため俺は、拾った地図と船員の会話を照らし合わせるなどし
て、それぞれの船がどこから来たのか調べていたのだ。……まア結
局、一番参考になったのは捨てられるゴミの内容だったが。

「うーん……俺ってスカベンジャーが天職だったのかも」

なんて冗談はさておき。

やるべきことは多い。服を着替えないと。船内で食料も尽きてし
まったし、なにより天空闘技場までの行き方を調べないと。

「っし、行こう！」

こうして、ついにはじまった。

流星街を出てはじめての——新天地での日々が。

ヨサン×ト×ヨハナン

流星街を出てバンダー港にたどり着いた俺だが……やるべきことはたくさんある。

まずは着替えだ。流星街から持ってきた、比較的きれいな服を身にまとう。それから……。

「お使いできたんです」「天空闘技場ってどうやって行けますか？」

「え？ 服が汚い？ じつはさつきまで海で遊んで……」

意外とコトは順調に進んだ。

お腹も満たせし、天空闘技場への移動手段も確保した。……まア、実際の順序としては、先に交通手段を調べてその費用を支払ってから、ご飯を買ったんだが。

「いやア、つぶねエ。予想よりカツカツだ……」

移動の費用や、かかる時間はかなりのものだった。

事前にある程度の計算はしていたし、多少は資金にも余裕を持たせていた……んだが。正直、あの余分だと思っていた3日間がなければ、飲まず食わずになっていたかも。ほんと、アレもコレも高エ。わかってはいたが流星街とは物価が全然ちがう。

最悪、交通費が足りない場合は無賃乗車でもなんでもするつもりだったが……足りてよかった。食費のほうはこのままじゃ天空闘技場まで持たなさそうだが……多少の空腹ならガマンしてトラブルを避けたほうが賢明だろう。

購入していたキップを持って、駅へ。

交通手段に選んだのは鉄道だ。というか一択だった。子供一人、身分証なしで乗れる長距離の移動手段がそれしかなかったのだ。本当は同じ値段でもっとはやく着く、高速バスを利用したかったのだが……。

「おや？ キミひとりかい？」

「はい、おばあちゃんの家まで。お母さんが練習だつて」

「うーん……大丈夫かい？」

「はい。でも……困ったことがあったら助けてくれますか？」

「もちろんだとも。……そうだね。私たちがすっかり見ていけば問題ないか」

「ありがとうございます」

「それでは、よい旅を」

キップを切ってもらい、車両に乗り込んだ。座席に着き、ようやく一息。……はあく、一番の難関は越えた。

しっかし……。

「目的地まで1500キロかア……最寄りの港からでこれだもんなア」

うろ覚えだが、東京―大阪間ってたしか500キロくらいじゃなかったっけ？ だとしたら……うわっ、1往復半もできる距離じゃん!?! そりゃ金も時間もかかるわけだ……。

そんなわけで天空闘技場まで1本じゃいけないらしい。一度途中の街―ヨハナンという街を経由することになるそう。チケットも改めてそこで買う必要があるのだと。

「移動に10時間と15時間かア……」

バンダーからヨハナンまでと、ヨハナンから天空闘技場まで。

長旅になる。しかし、ゴミ山や船の上に比べればずっと快適。俺は久々に、じつくりと『纏』の修行に打ち込んだ。

ここ1週間は『点』――精神集中の修行しかしてなかった。逆に『点』の修行には全力だったけど。だって……船酔いに耐えるために必死だったから。

旅はまだまだ長い……。

* * *

「ん~~~~~~~~!」

凝り固まった身体を伸びでほぐす。10時間……長かった。ようやくヨハナン。まだこれからも列車に乗らなきゃいけない。しかしこんな快適な快適な旅なら大歓迎だ。

正直、かつてないくらいぐっすりだった。……うん、『纏』の修行できてねエ。でも許してくれ。疲れが溜まってるってヤツだったんだにやあ。

「……しかし、うっかりしてたな。到着時刻を考慮してなかった」

ヨハナンに到着したのは深夜だった。どうやら次の天空闘技場行きの列車が出るのは明日の朝になるらしい。それまでどこかで時間をつぶさないといけない。

ほかの乗客たちは当然、ホテルへ行くようだが……俺にそんな金はない。

「んー、どうしたもんか」

駅の待合室で時間をつぶす——眠るか。しかし、うーん……さつきまで熟睡だったせいで、全っ然眠くないんだよなア。

迷って……結局、駅を出てブラブラと歩くことを選んだ。

「まだ、あちこち店開いてるんだな」

「といつても駅周辺だから、だろう。俺のように時間を持て余した人はいるはずだから。しかし、駅周辺だけあつて高い。お腹は空いたが、手を出せる金額じゃない。

「んー、もうすこし行ったら安いものとか売ってないかな」

ぽつんと軒、離れた位置に明かりを見つける。

近づいてみると、パンを売っているらしい。値段を見ると、ほかの店に比べてかなりリーズナブルだ。ひとつ購入しても、天空闘技場までのチケットは十分買える。

一番安いやつを指さし、注文する。

「……100ジェニーだよ」

こんな時間に子供ひとりだったからだろう。やや眉を顰め、しかし淡々と値段を告げてくる。面倒ごとには関わらないというスタイルらしい。俺にとってもありがたい。

俺はサイフからなけなしの100ジェニー硬貨を取り出し……。

「あつ」

チャリン、と硬貨の跳ねる音が響いた。落ちてしまった硬貨を探す。暗くてよく見えない。んー、どこだ？ えーつと……おっ、あつたあつた。暗闇の中に『100』の数字を見つける。

手を伸ばして硬貨を拾おうとして——ざわり、と背筋が凍りつくような感覚。

激しい既視感。吐き気さえ伴うほどに強烈な、イヤな予感。

「前にもこんなこと——」

直後だった。

——ガンっ！

俺は自分の後頭部で音が響くのを聞いた。

ゴウトウ×ト×コウトウブ

後頭部に激しい衝撃。俺は頭から地面に倒れた。
遅れて激痛が走る。

「ぐっ……が、はっ……あ、ア」

痛みで涙があふれる。視界がぐわんぐわんと揺れる。

「なんだ、なにが起きた……？」

「ひいひいひい！」

「オイ、オツサンは黙ってろ」

パン屋のオヤジの悲鳴が聞こえる。

ぐいつ、と身体を持ちあげられる。抱き起こされたのかと思いきや、そのまま脇へに放り捨てられた。地面を身体が跳ねる。

揺れる視界に映りこんだのは、高校生くらいに見える2人の青年。
1人が手に持つバットを見て、殴られたのだと気づく。

完全に油断していた。

「ほら見ろ、言ったとおりだろ。このガキ結構持つてやがるぜ」

「マジじゃねーか。お前ほんと目エいいな」

俺が見たのは、青年たちが財布から金を抜きとる光景だった。

……オイ、なにしてる。それは俺たちが——俺とマチが貯めた金だぞ。天空闘技場へ行くための資金だぞ！

「返、せ……」

「うわっ、コイツまだ意識あんのか!!」

「オイオイ、手加減しやがったのか？」

「え？ いやア、殺すつもりで殴ったんだけどなア」

「じゃあ、なんで血も出てねーんだよ」

「ん……オレ子供に優しいから？ 無意識に手加減しちやっつた？
みたいなの？」

「どの口で言いやがるんだか」

「ギャハハハハ！」

俺は這いずり、青年の足を掴んだ。

「返、せエ……！」

「あーもう、ウツゼー……なッ！」

——ドッ！

つま先が腹に突き刺さる。俺はええずき、腹を抱えて団子になった。脳が揺れていたせいか、うまくオーラでガードできなかった。痛い……痛い、痛い、痛いっ！ 苦しい、ツライ——だが、それ以上に「がえ……ぜエっ……、返ぜエ……！」

怒りが、あるいはべつの感情が胸中に溢れていた。

「オイオイ、まだ元気なのかよ。どんだけタフなんだコイツ？」

「あーじゃあ、オレがもう一発バットで……ん？ やばっ!？」

「クソッ、金は貰ったし、もう行くぞ！」

「うっす」

足音が遠のいていく。

代わりに、サイレンの音が近づいてくる。

「ああ、クソ。最悪だっ……なんでオレが巻き込まねりやいけねんだ」

パン屋のオヤジの、悪態が聞こえた。

このサイレンは……警察？ それはマズい。ここで保護と称して連れて行かれてもしたら、目的が果たせなくなる。なにより——。

「追わないと……見失う前に」

今ならまだ逃げていった方角がわかる。

痛む身体を抱えて、立ち上がる。かなりいいのを食らってしまったらしく、ジンジンと痛みがあとを引いている。

まだ頭がフラフラする。壁を支えに歩き出す。ちらりと後ろを見ると、パン屋のオヤジはもう我関せずといった態度でそっぽを向いていた。あの様子なら俺のことを警察に話したりもしないだろう。今はそれが、都合がいい。

「絶対に取り返す……」

タダじゃ済まさない。

青年たちを追いかける。だんだんと駅から離れ、暗闇が濃くなっていく。やがて、目が暗闇に慣れてきたのもあるだろう——ひとつの巨大なシルエツトが見えてきた。

「……………か？」

さつきまでは夜の闇に紛れて見えなかったが、すぐ近くに巨大なビルが屹立していた。周囲の建物と比べても飛びぬけて高い。円柱のような変わったデザインだ。……まあ、H×H世界においてはこれも平凡なデザインなのかもしれないが。

「行くう」

一般人程度なら不意を突かれぬ限りは大丈夫だ。今はもう、さつきみたいな油断もない。

ビルに足を踏み入れる。ビルの中は張り詰めたような空気——静けさに包まれていた。イヤな空気だ。緊張で手に汗がにじんだ。ごくり、と唾を飲み込む音が妙に響いて聞こえた。

進んでいくと、吹き抜けに出た。夜空が見える。この建物が円柱ではなく、筒状であったことを知る。

俺はかつてない集中力を発揮していた。そのおかげだろう。身体にオーラを充満させ、なんとか垂れ流すオーラを絞ることが——『纏』モドキを維持できていた。動きながらも。

これが最初から——常にできていれば、あんな奇襲で倒れることなんてなかったろう。己の未熟に腹が立つ。

そもそも、油断しなければこんなことには……。ここは安全な日本でも、慣れた流星街でもないんだぞ。自分の甘さがイヤになる。

「……見られてる、な」

静かだ。しかし、無人の静けさではない。たくさんのお客を——息を潜めているのがわかる。実際、ビルの中には多くの生活跡があった。

「いったいどこから見ている……？　そう、周囲へ視線を向け——。

「——なんで知らねエガキがここにいるんだ？」

「っ!？」

真後ろだった。

慌てて飛び退いた。暗闇の中に、だれかがいる。

——いつの間に？　さつきまで俺がいた場所だぞ……？

足音がだんだんと近づいてくる。吹き抜けるに差し掛かり、星明かり

がその人物の姿を照らし出した。そこに立っていたのは髪を逆立てた大男……。

その大男の姿を見た瞬間、ざわつと身体中の表皮が泡立つような感覚に襲われた。

ヤバイ……ヤバイヤバイヤバイヤバイ！

——あとになって考えてみると。

金は諦めればよかったんだ。取り返せるかもわからない金を追いかけるより、無賃乗車するがずっと簡単だったろう。

けれど、あのとときの俺にはそんなこと思いつかなくて。奪われた金を取り戻す——そのことで頭がいっぱいだった。

それに驕りもあった。一般人2人にやられたのは、あくまで不意を突かれたから。正面から戦えば、精孔を開いた俺なら——たとえケンカの経験すらなくなつて、その程度は相手にもならないだろう、と。

……俺は心底後悔していた。

ほんと、なにやっつてんだ。なんでこんな選択をしちまつたんだろう。……きつと頭を殴られたせいだ。それで冷静な判断ができなくなつていたんだ。そうにちがいない。

たしかに特別な金だった。でも……。

——だからって、命以上の価値はなかったはずだ。

少なくとも無賃乗車なら、バレても死の危険性はなかったはずだ。

「オイ、オレはテメエに聞いているんだぜ、そのガキ。だれに断つてここにいる？　ここがクート盗賊団のナワバリだつて知つての行動か？」

俺は目の前にいる人物の名前をこぼしていた。

「——レイザー」

平然と人を殺めることのできる、悪魔の姿がそこにはあった。

トウゾク×ト×トウソウ

——あア、ムリだ。

目の前に立つレーザーを見て思う。レーザーは完全に無防備だ。オーラもほとんど出してない。だが……。

——勝てない。

もしも俺がレーザーのことを知らなければ、騙されていたかもしれない。だが、よく見ればわかる。

内に秘められたオーラの量も、その洗練された流れも、体格も、戦闘技術も、意志も……なにもかも敵わない。

「……あつ、あつ」

恐怖に喉が引きつる。金なんてもうどうでもいい。今すぐ逃げたい。けれど来た道にはレーザーが立ちふさがっている。いやそもそも、足がすくんで動かない——自分の思い通りに身体が動かない。

「オイオイ、どうかしたのか？ オレは訊ねてるだけだぜ？」

レーザーが一步近づく。俺は押されるように——足が勝手に、一步下がった。本能がそうさせていた。それを見たレーザーが呆れたような息を吐く。

「なんだそりゃ？ さっきまでの『やってやる』ってオーラはどうした。……はア。その歳でヘタクソなりにオーラ扱えてんだ。ちったア骨のあるヤツかと思っただがよオ」

「っ……」

ダメだ……オーラの流れで感情が読まれている。直感する——もし、逃げるような素振りを見せれば、1秒後に俺は死ぬ。

……くそっ！ なんでレーザーがこんなところにいるんだよ!?

それに、クート盗賊団だつて!?

たしかに、レーザーが元はクート盗賊団だった、という考察をネットで見ることがある。しかしそれは、根も葉もないウワサだったはずだ。……はず、なのに。

「で、なんでここにいる？」

ウソを吐けばオーラでバレるかもしれない。脳裏を、ピトーを見張るゴンの姿がよぎっていた。

俺は震える声で答える。

「……俺から金を盗んだ2人組を追ってきた」

「それで？ どうするつもりだ？」

「金はもう諦めて、帰る」

「ヘエ？ どうやって？」

「っ——！」

圧迫感が増す。

錯覚だ。わかっている。レーザーはオーラを出してすらいない。けれど、まるでレーザーのオーラが——殺意が俺を取り囲み、押しつぶさんとしているように見えた。

「そう警戒するなよ。帰さないなんて言っていないだろ？ そうだな、ここから出たいなら通行料として——100万J（ジェニー）払ってもらおうか」

「なっ——」

こいつ、わかってて聞いてやがる！ 先ほど、金を盗られたと言っただばかりなのに。

だいたいレーザーほどの実力があれば100万ジェニーなんてはした金のはずだ！ きつと、金額なんてなんでもよかったんだろう。最初から帰す気なんてないんだから。

「どうした？ 払えないのか？ なら仕方ないな。足りない分は、ウチで働いて返してもらおうとしよう」

「……は？」

冗談じゃない！ 俺に盗賊をやれだって!? そんな条件飲めるはずが——。

「やってくれるよな？ でなきや落とし前がつかんだろ。なア？」

「……お、俺はこれから天空闘技場へ行くから、その賞金で」

「ダメだな。今払うか、働くかのどっちかだ。で、払えるのか？」

「……払えま、せん」

「決まりだ。お前には明日から働いてもらう。ま、精々ががんばるんだ

な」

「っ……」

「返事はどうした？」

「……はい」

「ああ、そうそう。逃げたいなら逃げていいぜ」

言って、レイザーは去っていく。どつと汗が噴き出す。その場に崩れ落ちた。

逃げ出す？ とんでもない。そんな気は微塵も湧かない。

しばらく、ぼうつとしていると、入口からゾロゾロと人が現れる。

——いったい、これだけの人数がどこに隠れてたんだ？ レイザーのときと同様、気づかなかった。全員、それだけの実力があるということだろう。

その中の1人がポンと俺の肩に手を置いた。

「命拾いしたなあ」

言われて気づく。レイザーがオーラを出していなかったのも、逃げてもいいなんて言ったのも……全部、甘いワナだったのだと。

「ッ……！ はっ……はっ……！」

今さら、恐怖で過呼吸のようになる。

俺——死んでた。ひとつでも行動がちがってたら、その瞬間に殺されてた。

「あーでも、つまんねエ。最初に見つけたのがオレなら、すぐに殺してやったのに」

「まあ、そう言うなって。力の差がわかるくらいの実力はあった、つてこつたろ。大体、暴れたいなら明日があるだろ」

「そうだったそうだった」

「……あ、明日？」

俺は知らず、問いをこぼしていた。

盗賊の一味は凶悪な笑みを浮かべて答えた。

「ああ、そうだ。明日だよ、新入り。お前は運がいい。なにせ大仕事だ」

「いったいなにを……」

「明日は全員で、とある遺跡の財宝を——根こそぎいただくのさ」
聞いた瞬間、俺の中でなにかが繋がるような気がした。

クート盗賊団に所属するレイザー、とある遺跡の財宝……いや、あれはちがうはずだ。でも、もしかしたら。だとすると……。

「新入り、お前はオレと来い」

「……はい」

今は……ムリだ。でも明日の襲撃の最中、隙を突いて逃げ出す。でなければ——俺はムシヨにぶち込まれることになる、かもしれない。

俺はその日、眠れなかった。恐怖が俺を寝かせなかった。

——そして、翌朝。

俺は、自分の考えが甘すぎたことに気づく。命を危険にさらしてでも、ムリヤリにでも逃げ出すべきだったと。

* * *

「——あく、おーい聞こえてるかー？ クート盗賊団のクソ野郎どもオー」

朝一。ビルに声が響き渡った。吹き抜けから1階を見下ろす。そこにひとりの男が立っていた。

「テメーら、ずいぶんと楽しいコトをやろうとしてるみてーじゃねーか。悪いコトは言わねーから、手エ引いとけ。今ならまだ、オレも許してやるよ」

「……ずいぶんと傲慢な客だな、オイ」

レイザーが男の前に姿を現す。

「ん？ お前が親玉か？」

「オレはただの雑用係さ。最弱とは言わんがな」

「だろうな。ま、お前でいいや。……で？ 引いてくれねーか？」

「引くわけねエだろうが、バカにしてんのか？」

「……はア。まア、だろうとは思ってたけどよ」

「殺す前に名前を聞いてやるよ」

「オレか？ オレの名前は——ジンフリークス」

男は——ジンは、人を食ったような笑みを浮かべて、言った。

「――ハンターだ」

フトウ×ナ×フコウ

クート盗賊団の占拠するビルに現れたのは、ジンだった。

「……強エな。だがクート盗賊団にケンカ売って、生きて帰れると思うなよ？」

瞬間、2人の——ジンと、レイザーの姿がブレた。次のタイミングにはもう、両者がこぶしを交わしている。同時にビルの四方八方から人が飛び出し、ジンへと殺到する。

その数は100……1000……いや、それ以上。これだけのサイズのビルを占拠しているのだ。相応の人数がいるのは、考えてみれば当然。しかも、レイザーにも匹敵するオーラを持つものがゴロゴロといる。

……デタラメ人間の万国ビックリショーか？

決断は早かった。俺は、この混乱に乗じて逃げ——ようとしたとき。

「——フッ！」

レーザーが放出したオーラをスパイクしていた。それが流れ弾となって俺の近くに着弾した。地面が崩壊する。余波で身体が吹き飛ばされる。

飛んできたガレキが頭に激突するした。意識はブラックアウトし――。

——目を覚ますと俺は、牢屋の中にいた。

* * *

「……なんで、こんなことに」

頭を抱えるが、どうにもならない。

窓はない。傷はすでに手当されているが、どれくらい時間が経過したのかは不明。ここがどこなのかもわからない。

ほかの牢屋を見ると、隣も向かいも斜めもその先もずっと、クート盗賊団のメンバーだ。

「どう考えても俺、誤解されてるよな……」

手錠と呼ぶにはゴツすぎる拘束具を見下ろす。オーラが出せない。どうやら強制的な『絶』の状態にされているらしい。

それに、拘束具のデザインに見覚えがある。ハンター試験の第3次試験——トリックタワーでジョネスたち犯罪者の腕を封じていたものによく似ているのだ。

思えば、ジョネスは人の肉を指の力でむしる、と言われていたが——本当に指の力だけでコンクリを砕けるかと問われると、疑問符だ。おそらく、無意識にある程度のオーラを扱っていたのだろう。

実際、俺が目を覚ましてから一度、あまりに暴れるメンバーがさらに足を拘束されることがあったのだが……その際、拘束具の内側に神字が刻まれているのが見えた。

この拘束具もだれかの念能力だろうか？

だとすると、人数上限なしの強制『絶』じゃ汎用性が高すぎるし……自身の手で神字を刻むことが制約、とかだろうか。それなら必然、個数に限りが出てくる。

そう、よしなしごとを考えていると……。

「ん？」

こちらに近づいてくる足音が聞こえた。

足音は至近にまで迫り——ジンが牢屋の前を横切った。

「っ！ ま、待っ……」

「よくもオレ等をム所にぶち込みやがったな!？」

「クソ野郎！ ぶっ殺してやる!」

「今すぐここから出しやがれエ!」

俺の声は怒声にかき消された。ジンは一斉に浴びせられる怒声を意にも介さず、笑っていた。

「おーおー、元気のいいこった。さて、今日はお前らに裁判の結果を持ってきてやったんだが……よろこべ！ 全員死刑だだよ」

「「ぎっけんなコラアー!」」

「そんな死刑囚どもにオレが選択肢をくれてやる。余生を過ごす場所をお前ら自身に決めさせてやる。——この地下牢か、それとも孤島

か。好きに選べ」

「……オイ、そいつアどういう意味だ？」

聞こえたのはレイザーの声だった。ここからは見えないが、意外と近いところにいたらしい。

「つまりこう言ってるんだよ。『ここで死にたくなきゃオレの下で働け』ってな。わかったか——レイザー？」

「っ！　なんで、オレの名前……」

「そりゃ、調べたからな。お前だけじゃねーぜ？　ここにいるヤツらの顔と名前と経歴、趣味趣向くらいなら全部知ってる」

「……は、ははっ」

レイザーが思わずといった様子の声をこぼす。

「めちやくちやだなテメエ。オレらをここにぶち込んだのはテメエだぞ？」

「それがどうした」

「……背中刺されても恨むなよ」

「おう。刺せるもんならな。……ほかにもオレに雇われないヤツがいるなら、今この場で言ってくれ！　今日中にはここを発つ予定だからな！」

クート盗賊団のメンバーが次々と手を挙げる。その目にはジンに復讐してやる、という反骨心がありありと浮かんでいた。

俺も慌てて声をあげた。

「ま、待ってくれ！　俺は無罪なんだ！」

「……ん？　あー、名無しのヤツか」

「名無し？」

「おう。お前、流星街出身だろ？」

そういうことか。考えてみれば当然だ。俺は生まれてはじめて流星街を出たばかり——経歴どころか戸籍もない。国際人民データ機構にだってデータはゼロだろう。

「あ、あアそうだ！　俺はクート盗賊団のメンバーじゃないんだ！」

「んん？　いや、お前は間違いなくメンバーだろ」

「……は？」

「オレが調べたかぎり、お前はクート盗賊団に入ることを受け入れたはずだぜ」

言われて、ハツとする。たしかに俺はレイザーの問いに了承した。「それはっ……で、でも」

「一応言つとくが、今回の死刑はお前らの頭が代表として裁判に出廷して、メンバー全員に適用された罪状だ。さすがに何千人もいちいち裁いてられねーってよ」

「そん、な……だって俺はなにも悪くないのに」

「なにも悪くない？」

そのとき、ジンの雰囲気が変わった。

「はつきり言うぜ？ —— 甘えてんじゃねーよ」

なんて……なんて強い意志のこもった眼差しだろうか。

ジンの視線に俺は怯んだ。

「悪くない、なんてこたねーだろ。お前には力がなく、なにより意思が弱かった。 —— お前はあるとき、意地でも受け入れるべきじゃなかった」

「……だって、仕方が」

「仕方なかった —— そうだな。断言してやる。あのままならお前は『仕方なかった』で盗みをやったし、殺しだってやるぜ」

「……俺、は」

「もう一度言つとくぞ。 —— 甘えてんじゃねーよ」

気づくと俺は崩れ落ちていた。

だって反論できなかつたのだ。ジンの言うとおりであった。脅されれば俺はやっていかもしれない。いや、やっていたらう。ただ、順番がちがっただけ。罪を犯すよりジンに会うのが早かつたという、ただそれだけのこと。

だって俺の心は……レイザーに向き合った瞬間に、すでにポツキリと折れてしまっていたのだから。

—— 俺は、なんて弱いんだ。

「でもまア、運が悪かったとは思うぜ。ここまで言つといてなんだが、お前は無罪だろ。まだなんもしてねーし、強要されただけだ。冤罪が

晴れりや、すぐ出られるだろうさ」

「じゃあ、出して……」

「でも、オレにそんなことをしなきゃならん義理はねーな。メンドクせエ」

「そんな」

「出たきや、自分で証明することたな」

ジンが立ち去ろうとする。

俺の脳裏を駆け抜けたのは、ひとつのエピソード——流星街出身の浮浪者が冤罪で捕まり、じつに3年も拘束され続けた話。真犯人が捕まっつてようやく、だ。

「……ダメだ。それじゃ間に合わない」

「あん？」

「俺も行く……連れて行ってくれ！」

俺の無罪を証明できるのは、ジンしかない。

普通に模範囚として刑を受けていれば、案外あっさりと冤罪が証明されたりするかもしれない。だから、どちらが早いかはわからない。ただ、俺はこうするべきだと、そう——直感した。

「マチ……」

「ちいさく彼女の名前をつぶやく。」

俺はなにをやってるんだ。マチを幻影旅団に入れないことを志しておきながら、自分は脅されるがままに犯罪組織に所属してしまった。

——それじゃ、道理が通らないだろうが！

俺は自分の中でなにかが変わっていくのを感じた。いや、変えなければならぬとはじめて思ったのだ。俺には『燃』が——意志の力が足りない。

「ん、来るのか？ ベつにいいぜ。じゃあお前の名前も聞いとかねーとな」

「……マーティー。俺の名前はマーティー＝ストウーだ」

不思議な感じがした。

多分、きつと。あとになってから思う。俺はこの瞬間に、本当の意

味でマーティー・ストゥーになったのだろう、と。

「マーティーだな、覚えてたぜ。これからよろしくな」

そうして俺たちは牢屋から連れ出された。

ジンが言っていたとおり、その日のうちに飛行船に乗せられ――。

――そして、数日後。

俺たちは、今はまだ名もなき島へと足を踏み入れたのだった。

アカンパニー×オン×アントキバ

やがてG・Iとなる島へと連れてこられた俺たち。

レイザーが代表して訊ねる。

「で、どこだここは」

「元々はある国が使つてた流刑地なんだけだよ。ちようどよかつたから、そこにいたやつらごと買い取つたんだ。……あー、言つてもムダかもしれんが、そいつらと仲良くやれよー」

「で、オレたちになにをさせるつもりだ?」

「そう早まるなつて。見てろ——ブック」

ジンの手元に一冊の本が現れる。

「なんだそりや? テメエの念能力か?」

「いいや、ちがう。これは……まア、いっちまうと舞台装置だな」

「舞台つて、なんの?」

「それは——島を丸々ひとつ使つたゲームの、さ。お前たちにはこれから、オレたちのゲーム製作を手伝ってもらう」

「……はア?」

知らなければ俺もレイザーたちと同感だつたらう。死刑囚を集めてやるのがゲーム制作だつて? なにを考へてるんだ、と言いたくもなる。

「まだコイツも未完成だけだよ……すつげエ楽しくなるぜ。これから」

「……もしかしなくてもバカだろ、テメエ」

「んだとコラア? オレはただ、オレがおもしれーと思つたことを全力でやってるだけだつつの」

「やっぱバカだろ」

ジンが「あ、そうそう」と手を打つた。

「お前らの雇用条件を一応確認しておくぜ。働きに応じた減刑、死刑の延期でいいな? あとは作つたゲームもいくらかプレイさせてやるよ」

「おいおい、それじゃあ足りてねエだろ——お前が死んだ場合の条件

は？ 事故でうつかり、なんてこともあるだろ？ そうなったとき、オレたちの首も一緒に飛ぶんじゃなかったもんじゃねエからよ」

「ありえねーことは雇用条件に加える必要ねエだろ？ そんなときや勝手にしろや」

「……後悔してもしらねエぞ？」

「言っただろ。やれるもんならやってみる、ってよ。それと、ゲーム開発をオレとはじめた仲間がいるんだが……ま、紹介は今度でいいか。そのうち会うこともあんだろ。……で、お前たちにやってもらいたい仕事だが——ゲームのアイテム作りだ」

ジンがバインダーからカードを1枚取り出す。

「あん？ なんだそりゃ」

「試作品さ。今から建設中の街へ行く。——『同行(アカンパニー)』使用(オン)！ アントキバへ！」

「——なっ!?!」

次の瞬間、身体が浮遊感に包まれていた。気がつくところこそは建設中の街の中だ。アントキバ………というところは、ここは将来の懸賞都市か。G・Iにきたゴンたちが、最初にたどり着くことになる都市だ。

アントキバにはすでにちらほらと人が見えた。さきほどジンが言っていたセンパイたち——流刑囚だろう。

「今のは念能力、じゃあねエのか？」

「スペルカードつつって、魔法——って設定の能力が使える、ゲーム内アイテムだ」

「オイオイ、っーことはなんだ。だれでもそのカードがあれば今のが使えるってことか？」

「ああ、その通りだ。どうだ？ 最高に面白そうだろ？」

それからジンはゲームのシステムやルール、製作途中のアイテムや建設予定の街について楽しそうに……本当に楽しそうに、何時間も語り続けた。

「ふー……とまあ、とりあえず現状決まってるのはこんなところだ。あとの足りない分はこれから考えながら作っていく感じだな」

「……すさまじいな」

レーザーが零した。

「そういえばレーザー、お前は放出系能力だったな」

「ああ、それがどうした？」

「ならちようどいい。お前、移動系スペルを担当しろ」

「は……？」

「さつき使った『同行（アカンパニー）』みたいなやつだな。ほかのヤツらにも念能力に合わせてそれぞれの開発を手伝ってもらおう予定だ。いやー、助かったぜ。レベルの高い念能力者を大勢確保できて」

「ハッ、言いやがる」

ジンにパパッと選別される。が……。

「あの、ジンさん。俺たちはどうすれば？」

「お前らはまだ四大行ができねーんだったか。んー、念能力者は多けりや多いほどいいしな……よし。まったく念ができねーヤツは土木工事に加われ。それ以外のヤツは——よろこべ。オレが直々に指導してやる」

「……！」

それはなんとという幸運だろうか！ やがて世界最高峰とまで呼ばれるハンターとなる……いや、もしかしたらすでにそうかもしれないジンから念を教われるだなんて！

そう俺は降って沸いた幸運に感謝し……。

「ちようど、色々と試したいものがあつたからな」
「え」

——あれ？ なんか……イヤな予感が。

* * *

ジンが俺たちを連れて行ったのは、アントキバから北へ10キロほど行った崖だった。指示されるがままに梯子を伝って崖下へと足を下ろした。

その場所が四方とも崖に囲まれた窪地になっていることに遅れて気づく。

崖上から俺たちを見下ろし、ニツとジンは笑った。

「じゃあさっそくやるか」

「へっ?」

困惑する俺たちを無視して、ジンはバインダーから取り出したカードを崖下にバラまいた。そのカードを見た瞬間、ぶわっとイヤな汗が流れた。

ちょうど1分後。ボン! とカードが消え、代わりに現れたのは……ハエ、ハエ、ハエ。それらは俺たちへと群がってくる。

「ぎゃアああああああ!」

逃げ回るが、あつという間に追いつかれる。

「あいだだだだだ!?! 痛い痛い痛い!?! こいつら噛んできやがる!」

「死にやしねエから安心しろ。まア、めちやくちやイテーけどな」

俺はこのハエに覚えがあった。G・I内でゴンやキルアを追い回していたモンスターの一種だ。でも……あれ? と疑問が浮かぶ。

ハエに襲われている人と、あまり襲われない人がいる。

「そいつらはオーラを嫌う。だから、噛まれたくなけりやしつかりと『纏』をがんばるこつたな」

「そういうことは早く言え! へへっ、そういうことならオレサマにやあ……いだだだだだ!?! オイ、『纏』しても噛んでくるじゃねーか!」

「そりや、お前の『纏』がハタクソだからだろ。こいつらはオーラにムラを見つけりや、そつから集ってくるからぜ。しつかりと維持するこつた。ちゃんと『纏』ができるヤツはさつさと上がってオレについてこい」

「へへっ、そういうことならヨユーヨユー」

ハエに噛まれていなかった受刑者のひとりのはしごへと手をかける。

「あ、忘れてた。——ゲイン!」

ボンツと音を立ててはしごが消える。ジンの手に一枚のカードが握られていた。

「おいなにしやがる!」

「上がりたきや、自力でこの崖を上がってくるんだな」

「……チツ、ナメやがって。べつに梯子なんざなくたって……アイダダダダダ!？」

意気揚々とクライミングをはじめた受刑者があつという間にハエに集られ、崖の途中から落下した。

難易度の高さに頬が引きつった。

ただ『纏』を維持するだけじゃない、その状態で自由に動けるようにならないとこの窪地からは脱出できないのだ。

「定期的にメシは運ばせるから安心していいぞ。じゃあな」

それだけ言ってジンはあっさりと去っていった。

「え？ うそん。指導ってたったこれだぎやアああああ!？」

ジンに不満をぶつける暇すらなく、俺は群がってくるハエの対処に追われることになった。

そうして、やがてG・Iと呼ばれることになるこの島での生活がはじまったのだった――。

ゼツケイ×ナ×コウケイ

G・Iでの修行の日々が過ぎて行く。

俺は『纏』を維持しながら崖の壁面を登っていた。あと少し……あと少し……。だんだんと身体にハエが群がりはじめる。その数は壁を登るほど増していき――。

「アイダダダダ!? ——ぎゃふん！」

痛みに耐えきれず、壁から落下してしまう。

「アイダダダダダ! しっ! しっ! 噛むな! このっ……落ち着け、すー、はー」

ようやく『纏』が安定し、ハエが去っていった。

物理的なダメージがまったくないからだろうか? 逆にいつまで経っても痛みに慣れない。

……また、落ちた。

焦りが俺を苛もうとし――深呼吸してそれを飲み込んだ。

『点』を乱せば『纏』が乱れる。そうするとハエに噛まれる。それらが繋がっていることを、俺は自分の身をもって理解していた。どちらが欠けてもいけないのだ。

「もう一回だ」

「がんばるねエ、ガキンチョ。なーにそんなに必死になつてんだか」

ほかの受刑者からやつかみが飛んでくる。どこかの不良崩れだろう。アイツらはもうダメだ。すでに諦めちまつてる。

俺はやっかみをムシして再び壁に手をかけた。

「お前もさっさと諦めアイダダダダ! あっクソっ、こっち来んな!」

さらに絡んでこようとした受刑者がハエに集られる。

悲鳴が続く――唐突に静かになった。痛みあまり気絶したらしい。

あれからいつたい、何ヶ月が過ぎた?

最初は数えていたのだが、先ほどの受刑者のようにハエに噛まれた痛みで気絶することも多く、いつの間にか日付の感覚はなくなってしまう。

しかしこの極限状態は、確実に、そして急速に『纏』の精度を上昇させていた。

外国語を覚える一番の近道は海外へ行くこと——必要に迫られること。それを体現していた。

だがひとつだけ、これだけは言わせてくれ。

「ジンのクソヤロオおお！　ここから出たらゼツテーぶつとばしてやらアあああ！」

なアにが『指導してやる』だ！　これのどこが指導だよ！　放置プレイもいとこじゃねーか！

最初の『ジンさん』呼びも今は昔。原作キャラへのあこがれなんざ、とうの昔に消え去った。

ジンのやっつてゐることは間違つてない。実際成長してるし。だが納得いかない。めっちゃ腹立つ。ジンが高い実力を持ち多くの功績を残しながらも、ハンターみんなから罵倒を投げられるのがわかった気がする。

あるいはこれすらもジンの狙いなのかもしれないが。

——反骨心とやる気は類義語だ。

「ふっー」

手足に力を籠め、再び崖を登りはじめる。ゆっくり、しかし確実に。

焦るな。焦れば『纏』が乱れる。

「はあ……、はあ……」

崖の出っ張りに手をかける。力が籠もる。そのたびに『纏』が揺らぐ。それは、自然体を主とする『纏』とは対極にある行動だ。

だから、その両者を両立させる方法はひとつしかない。つまり“慣れ”だ。

だんだんと空が近づいてくる。

あとすこし。ここからがしんどい。欲は『点(こころ)』を、すなわち『纏』を乱れさせる。いつもここで失敗する……のだが、今回はいつもとなにかが違った。

「……あれ。なんか、空が、広い」

身体は崖登りに全力を費やしているのに、頭にはぼんやりと関係な

いことが浮かんでいた。

今ごろマチはなにやっつてんだろ。まあアイツのことだし、どーせツンケンしてんだろなあ。アレがマズイ、コレが汚い、ソレが嫌い。何度聞かされたことか。

「オイオイ。あのガキ、行けんじゃねえか？」

「マジかよ。あんなガキが？」

外野の声がやけに鮮明に聞こえる。だが、それらが俺の『点』を乱すことはない。どころか「ははっ」と思い出し笑いがこぼれていた。

そうだ、今思いついた。流星街に戻る際にはひとつ、アイツにプレゼントを買って買ってやろう。いつも、長い髪をうつつとうしそうにしていたから――。

「――あれ？」

俺は指先に違和感を感じ取った。

壁が、ない。

何度も壁を登っていたせいでボロボロになった俺の手が、いつの間にか崖のフチに掛かっていた。自然と背後を振り向いていた。受刑者たちが俺を見上げている。ハエはまるで諦めたかのようにいなくなっていた。

だれが言っていたんだっけ。

人の成長は一定ではない――あるとき急にドカンと伸びるもんだ。

「広いな、この世界は」

遠い。窪地の端々までよく見える。その向こうには青々とした森がずっと先まで広がっている。そのさらに上には蒼穹。強烈なコントラストが目刺さる。

涙が出そうになる。俺はG・Iという世界の美しさを目の当たりにしていた。

グツと身体を持ちあげ、崖の上に立ち上がった。

それはもはや俺にとって容易いことだった。

「……………ぶはっ」

今さらになって、ぶわつと汗が噴き出す。膝から力が抜け、へたり込む。

崖下から「あんなガキに先越された!」「冗談キツイぜ!」と悲鳴。「そうか。俺、やったのか。……は、はは……そうか、やったのか!俺! やったのか!」

感情が遅れてこみ上げてくる。その喜びをほんの少しだけ噛みしめてから、俺は頭を振るってそれを払った。

そうだ、思い出せ。

俺の目標は“ここ”じゃない。

アントキバへ向けて足を踏み出す。まだ膝が笑っていた。

拳を打ちつけ、しっかりと活を入れる。一步、一步、着実に。歩みはだんだんと速まり、やがては全力で駆けていた。

すぐに自分の変化に気づいた。

「身体が、軽い」

『纏』を身につけた成果だろう。一步踏み出すたびに身体がグンと加速する。足がいままでにないくらい強く大地を踏みしめている。

まるで身体が風になったように木々の合間を駆けていく。

「すぐ迎えに行く」

アントキバはあのころよりもずっと近かった。

* * *

森を抜け、アントキバに帰還した。

アントキバの様相はまるつきり変わっており、それこそ街と呼ぶに足るものへとなっていた。

「おーボウズ、見ない顔だな。崖下組か?」

土木作業をしていたらしい男が俺に気づき、声をかけてくる。俺が領くと男は抱えていた木材を置き、「ついてこい」と歩きはじめた。

道中、ずっと気になっていたことを訊ねた。

「今日って何月何日ですか?」

「12月2日だ」

俺がここに放り込まれたのが5月だったから、7カ月が経過していることになる。マチに教わっていた期間を合わせればちょうど1年で『纏』を習得した計算だ。

おかしな精孔の開きかたをしている、と言われたにしては早い。

本編でビスケも言っていたが、G・Iがいかにも念能力者の育成に優れているかがよくわかる。

石田スイが書いたヒソカの過去編でも『早くて1年』掛かると語られていたし、プラマイゼロむしろプラスといったところ。

「お前タイミングがよかつたな。今日はちょうどジンの野郎が来る。これからなにさせられるかはアイツから直接聞け。あー……ただし、アイツをぶん殴るんならオレが去ってからで頼むぞ」

「……」

わざわざそんなことを言うくらいだ。過去にやったヤツがいるんだろう。

気持ちはすぐわかる。

そうこうしているうちに人だかりが見えてきた。その中心にいたのはほかでもない、ジンだ。

となりにはレイザーもいる。すこし丸くなったか？ どころなく目元が優しくなっている。

「おい、ジン。連れてきたぞ。崖下組だ」

「苦労さん。んじゃ、お前はもう帰っていいぞー」

「チツ……相変わらずオレらをこき使いやがって。いつか覚えとけよ」

「おう、精々ががんばれ」

「……だア、クソッ」

ガシガシと頭を掻き、男は去っていった。ケンカ腰だったが、なんというか……気心の知れた仲だからこそその軽口、みたいな。

ほかの、今ジンの周りに集まっている人たちもそうだ。殺し、殺される関係だったはずが随分と仲がよくなっている。さすがはジンというか、なんというか。

「ようマーティー、遅かつたな」

牢屋での自己紹介を覚えてくれていたようだ。

しっかしコイツ、遅かつたとは……どの口が言ってやがるんだか。

「ジン、牢屋での約束——」

「お前、ちようどいいところに来たしなんかアイデア出せ。この街の

イベント考え中なんだけどよオ、なーんかしつくり来ねーんだよなー」

……こ、コイツほんま。

人の話を聞け！ とツツコミたいがどうせ聞きやしない。さっさと話題を切り上げよう。

「あー、ジャンケンとかいいんじゃないっすかねー」

「採用」

即決かい！ 原作を知っているとは言え……。

同じことを思ったのか、レイザーからもツツコミが入る。

「オイオイ、そんなテキストでいいのかよ」

「いいんだよ。つーかテキストじゃねエ。この街はプレイヤーの多くが最初に来ることになる場所だからよ、能力が低いヤツにも勝ち目のあるゲームが欲しかったんだ。なおかつ、実力が飛びぬけてるヤツなら動体視力でさっさと勝ち抜けられる」

「なるほどねエ。そーいうもんか」

「それでジン、約束の――」

「じゃんけんホイ！」

「え、あ」

思わずグーを出す。ジンはパーを出していた。

「オイの勝ち。つてことでお前、今からドリアスのテスト役な」

「……はい？」

「ちようどいいだろ？」

「いや、ちようどいいってなんだよ!? 俺はそんなヒマ……そもそもドリアスって、」

「ギャンブル都市だ」

ドリアスがなにかを聞いてるんじゃないやねエえええ！

俺は――。

「そこ攻略して景品のカードを入手できたら釈放してやってもいいぜ」

「っ!？」

釈放。それはまさに俺が望んでいたことそのものだ。

俺がさつきから何度も話そうとしていたことだ。

「な、悪くねエ条件だろ？ あーでも改善点まとめてレポート提出までセットな。レポートのできが悪けりゃあ、たとえカード入手できても釈放はナシ。んじやレイザー、案内しといて」

「……………つたく。——ブツク」

レイザーが俺の肩に手を置いた。

『同行（アカンパニー）』使用（オン）！ ドリアスへ！』

身体を浮遊感が包む。

景色があつという間に後方へと流れていく。その光景に一瞬目が眩み——次に目を開いたときには、豪華な街が視界いっぱいに広がっていた。

カクヘン×スル×カクリツ

ギャンブル都市ドリラス。

俺はそのあまりに豪華な街の光景に圧倒されていた。

「こつちだ」

レイザーの背を追う。

ふと思った。すでにレイザーはかなりの自由を与えられているようだ。たとえばだが、逃げようと思えば逃げられそうなくらいに。

「なぜオレが逃げねーのか、って思ってたんだろ」

ドキツと心臓が跳ねる。

いや、ちよつと違うけど……俺のこと逃がしてくれたりしないかなー、とは思ってた。

「残念だがアイツはそこまで甘くねエよ。この島全体を監視してるヤツがいる。それも、ふたり」

イーナとエレナだ、とすぐにわかった。それぞれグリードアイランドへのログインとログアウトを担当しているGMだ。

いや、ドゥーンとリストのこともかもしれないが。

にしてもレイザーはツンデレだなア。

監視がいたからといって、戦闘能力でレイザーがジン以外に劣るとは思えない。

「なんだそのツラは」

「え!?! い、いや〜」

「チツ……まア、べつに構いやしねエか。オマエはジンのお気に入りみたいだしな。……ここから先はひとりごとだ」

そこから先の話は知ってのとおり。

ジンはいずれ息子がこの島へやってくると告げた。そのときは遠慮なくぶつ飛ばせ、と。そう、レイザーに「頼んだ。レイザーははじめて、レイザー」という個を認めてくれたジンに――。

と、その話を聞いて俺は思った。

ん? ちよつと待て。てことはもう今、ゴンって産まれてるのか!?

今が1986年12月2日。ゴンが産まれるのが年齢から逆算して、えーつと……1987年5月5日か。てことはゴンは今、母親のお腹の中にいるってことか。

妊娠5ヶ月……性別がわかってもおおかしくない時期だ。あるいは“それ以外”か。

ゴンの出生には秘密が多い。

それこそ人間じゃない可能性だってある。

「……しゃべりすぎたな。ここが目的地だ」

ひととき大きな建物の前で立ち止まる。そこにはハンター文字で大きく『CASINO』と書かれていた。

「案内はここまでだ。これを持っていけ」

「おつとつと」

投げられたものをキャッチする。それは指輪だった。

「まア、精々ががんばるんだな。——『磁力（マグネティックフォース）使用（オン）！ ジン！』」

レイザーは恥ずかしさを紛らわせるかのように、さつさと飛び去ってしまった。

いや、それはいいんだけどバインダーの使いかたも、どのカードを入手したらクリアかもまだ聞いてないんだが。

俺じゃなかったら詰みかねないぞ、これ。

つたく。と嘆息してから指輪を嵌める。

「ブック！ ……ふむ？」

パラパラとページをめくる。

俺のプレイヤー名は『GUEST256』になっていた。わかりやすくテスト用のIDだな。数字を見るに、ほかにもテストプレイをしている人は大勢いそうだ。

今考えてみると、あの崖登りもテストプレイの一環だったのだろう。

バインダーは俺の記憶にあるものと差異が見られた。たとえばまだ指定ポケットとフリーポケットの区分けがなかったり。

こういった違いがじつにアルファ版らしい。

「さて、と。行くか」

カジノに足を踏み入れる。

「お、おおう」

一気に騒がしくなる。広大で芸術品のようなエントランス。

高級感と鉄火場独特の空気に、場違い感を覚えてしまう。

いかんいかん、と頬を叩いて気合を入れ直す。

どのカードが今回のテストプレイにおける収集対象か考えよう。

ゴンたちがドリラス（またはその周辺）で手に入れた指定ポケット

カードは『魔女の媚薬』『記憶の兜』『リスキーダイス』『レインボーダ

イヤ』『大ギャンブラーの卵』の5枚。

中でも目玉カードといえば――。

エントランスを通り抜けた奥、真正面をスロットコーナーが陣取っていた。

ぐるっと台を見て回る。台の上部には排出率と景品の名前が記載されていた。台の群れの中で発見する。

絵柄 景品

777

レインボーダイヤ

現代日本では、という前提が入るためあくまで参考にしかならないが……。

スロットマシンのコマ数は1リールあたり21個以下と決められている。20*20*20≡8000。1/8000は0.0125%。1/(21*21*21)はそれよりも少ないわけだから、ざっくり0.01%とちよつと。

約0.01%。作中でキルアが言っていた言葉と合致する。

台を見るとメダル1枚の交換レートが50ジェニーだった。プレイは、カジノ内のメダルでも、G・Iのジェニーカードでもどちらでもできるようだ。

1回転でメダル3枚だから実質150ジェニー。

「……あれ？ わりとどうにでもなるんじゃないかね？」

現在、無一文の俺が言うのもなんだが、余裕なのでは？　と思つてしまった。

我がことながら現代っ子の感覚恐ろしいな。ガチャ文化に染まったものなら0・01%はむしろ良心的に感じるころだろう。

電卓がないためどんぶり算になるが、排出率1%を100回ガチャして引ける確率が約60%だったはず。0・01%を10000回言引いたときの確率も同程度に収束するだろう。

それにスリーセブン以外が揃ったときに貰えるメダルもある。

スロットの還元率がたしか8割くらい。今回は1等が物品(レインボーダイヤ)だからそれよりもずっと低くなるだろうが、それでも何割かは返ってくるわけだ。実際に賭ける金額以上にチャンスは多い。

レインボーダイヤは作中で語られていたよりもずっと“安い”。

プロポーズが100%成功するトンデモアイテムが、そんな簡単に手に入る。

「相変わらずH×Hの世界の物価はよくわからんな」

天空闘技場では簡単に20億ジェニーが手に入る。G・Iは定価でも58億ジェニーする。G・Iで500億ジェニーを手に入れるために何十人と殺す。

……うーん。G・Iの1ジェニーが外の世界の1ジェニーに比べて重いだけ、と言われればそれまでだが。

なんにせよまずは、元手となるお金を稼がな――。

「おっと、っとー！」

考えごとをしながら歩いていたせいで、正面から歩いてきた人にぶつかってしまった。ジャラジャラジャラと、その人が持っていたメダルがあたりに散らばった。

「すいませ、」

「お、オレのメダルだ！　どけ！　だれも触るな！」

拾ってあげようとしたら、すごい剣幕で怒鳴られた。

まるで周囲がみんな泥棒にでも見えているかのよう。相手はメダルを掻き集めると、こちらを睨みつけて「死ね！　クソがつ！」と暴言を吐いてから、去っていった。

「え、ええ……う？」

いや、俺が悪かったけどそこまで言わなくても。そんなんじやあ、どんな運命の女神にだってそっぽを向かれてしまっただろうに。

そう肩をすくめ歩き出そうとしたそのとき、視界の端にキラリと光るものを見つける。さっきの男が拾い忘れていったのだろう、メダルが1枚転がっていた。

拾い上げて見ると、メダルはきれいなデザインをしていた。

このカジノのロゴが刻印されている。裏面にはグリードアイランドのロゴ。こういう細かいところにまで拘っているのが、ジンらしい。

「うーん」

わざわざたった1枚を、さっきの男を追いかけて返すのもなあ。揉めるのが目に見えているし。

「ま、いっつか」

俺は落としたものの箱に放り込むつもりで手近なスロットマシンにメダルを投入し、レバーを下ろした。そこへ「オイ」と背後から声が掛かる。

「はひィ!? ……あれ? レイザー?」

「今、いいか? そういやア、バインダーの使いかたや入手対象のカードについて説明すんのを忘れてたぜ」

あ、やっぱり忘れてたんだ。

さっきの男が帰ってきたのかと思って、ちよつとドキツとしてしまった。俺はテキストにボタンを押してさつきとゲームを終わらせ――。

――けたたましいほどのファンファアレが鳴り響いた。

見れば『7』『7』『7』が横一直線に揃っていた。

見間違いかと目をこするが、何度見てもスリーセブンが並んでいる。

「え、えーつと。どうしたらいいスカね、これ」

は、はは、とレイザーを振り向きながら問う。
彼は額を押さえ天を仰いでいた。

「……おいジン、これは想定してねエぞ」
レイザーは小さくそう呟いた――。